かゝつたる信乃一刀に奈四郎の首を刎れて木工作の仇を報ず。

同　十四年

○三月下旬、小文吾、越後小千谷を過ぎて石亀屋次團太方に投宿す。

○四月九日、小文吾、越後小千谷の闘牛を見物し、猛牛須本太牛の暴れ狂ふを押へて怪力を現はす。その晩、次團太の弟子磯九郎道に殺さる。

○五月十八日、小文吾眼疾、船蟲に刺されんとす。船蟲押へられて庚申堂の梁に吊されて鞭打たれるの私刑に行はる。犬川荘助旅次偶然通過して、欺かれて船蟲を助けて夫酒顚二の棲窟に送り届ける。その晩酒顚二、次團太を襲うて仇を討たんとして、却て小文吾、荘助に殺さる。船蟲手下の急を告ぐるを聞いて媼内と共に逐電す。

○五月十九日、荘助小文吾の二士、一は大塚の大石城代支配下の籔上宮六を斬殺した罪に由て刑せられようとした時同志に助けられて刑

場を遁れ、退手の兵を殺して脱奔したため、一は石濱にて毛野が馬加大記を殺した時、相共に石濱を脱出したため　大石千葉の岳母たる籔大刀自（小千谷の領主長尾景春の母）に睨まれ、その内命に由り執事稲戸津衛の詭計に陥つて、片貝別館に召されて捕へらる。

○六月中旬、稲戸津衛の苦肉策に由て荘助小文吾の贋首を以て籔大刀自を欺き、二犬士は危地を免れて走つて石和の指月院に頼る。幾何もなく、二人は再び信州に趨く。

○この夏、上總夷灘の成上り城主墓田素藤の寵妾死す。妖尼妙椿、幻術を以て素藤に里見の五の姫の姿を示す。素藤懸想して婚を里見家に求めて拒絶さる。素藤これを含む。

○九月下浣、犬村大角犬飼現八の兩士、千住穂北にて盗賊に會ひ、旅荷物を盗まれたのを土地の豪族氷垣夏行方へ入りたる草賊と疑はれて捕へられ、監禁されて私

刑に行はれようとしたを、夏行の娘なる賢婦重戸に救はれて監禁を脱し、計らずも信乃、道節と邂逅し、二人が賊を捕へてゐたので寃を解くを得。暫らく夏行の賓客となつて滞留す。

○十月中旬、四犬士石和の指月院に歸る。

○小千谷の石龜屋次團太の妻おこぜ、次團太の子分の土丈二と通じ、密會の現場を押へられたのを怨んで、船蟲が小文吾を刺さんとした短刀（船蟲が遜東太から竊んだ木天蓼丸）が次團太方に殘つてをるを證據として次團太を洒顚二の同類と誣ひて片貝へ訴へ、次團太は捕へられて入牢、嫌疑晴れずして、年を過ぐるも免されず。

○正月十日、莊助小文吾信州より石和へ歸る。六犬士指月院に集まる。

○正月十五日、大石和を去る。六犬士は穗北へ來る。大麻生に奸賊鷲觶坊を亡ぼし、牝牡の老貒に會ふ。

○正月十五日、里見義成嫡子

同　十五年

義通鎧の初着の奉幣に上總諏訪神社に參拜し、素藤の詭計に陷つて生擒せらる。

○正月二十日、小千谷の次團太の子分鯽三湯島の社頭に放下師物四郎に會つて次團太の寃罪始末を話してその救助を求む。恰も扇谷定正の室蟹目前社參あり。物四郎その愛猿の遜して社前の大木に登つて枝に鎖を搦められて悲叫するを救ひ、その褒美として次團太のための寃罪釋放の斡旋を求む。物四郎は武力を試されて、佞臣龍山兎太夫（籠山遜東太）の要殺を依囑せらる。

○正月二十日、船蟲司馬濱に辻君をして行人を殺害し、嫗内は船蟲と牛を竊みて飼主鬼四郎を殺し、天罰廻り來つて四犬士に捕へられ、毒婦奸賊牛刑に處せられて亡ぶ。

○正月二十一日、毛野、鈴森に龍山兎太夫を要擊して仇を復す。六犬士助太刀して兎太夫一行を殲す。定正變を聞いて自ら兵を率ゐて急に赴いて破れ、五十子城はそ

の虚を衝かれて落つ。定正の室蟹目前、忠臣河鯉權佐諫めて聞かれずして自刃す。翌二十二日、七犬士穂北に歸る。

○正月二十一日、義成三千餘騎を率ゐて素藤の館山城を攻む。素藤義通を櫓に縛りて寄手を威嚇す。義成攻むるを得ずして包圍持久の計を策す。

○二月下浣、義實近習數名を伴うて富山に登り、伏姫の墓を展す。兒從待伏して義實主從を襲ふ。危機一髪に際し、數年前神隱しに遭つた犬江親兵衛九歳、忽然現はれて危急を救うて義實に見參す。親兵衛その夜直ちに單騎館山城に入つて素藤を擒にす。功に由つて親兵衛館山の城主に封ぜらる。

○三月中旬、妙椿魔術を以て策を廻らし、親兵衛を義成に疑はしめて事を設けて館山稻村を遠ざけらるる。下旬、策成りて妙椿、素藤の隱れ家に歸り、その夜直ちに殘兵を集め、妙椿の魔術を借りて一擧館山を陷れて

再びその城に據つて叛す。

○四月初め　荒川兵庫の軍、妙椿の幻術のため大敗す。南彌六刺客となつて素藤に近づき、刺さんとして捕はる。妙椿、幻術をもて濱路姫を誘拐する途中、伏姫の神靈に會うて幻術破る。

○四月十一日、義成、親兵衛召還の使節を、蜑崎照文に命ず。

○四月十二日、政木孝嗣刑せられんとして靈狐に救はれ、計らずも親兵衛と邂逅し、靈狐の告にて素藤の再叛を聞き、安房に戻らんとした途次、兩國河原にて次團太主從の難を救ひ、招命使蜑崎照文とも邂逅して、一同早船にて館山に歸り、即夜城内に入つて、十三日未明、素藤を擒へ妙椿を折伏す。

○四月十五日、親兵衛、孝嗣以下を伴うて、結城に發足す。

○四月十六日、結城古戰場の草庵にて、大法師、里見季基以下の結城戰死者五十年忌前修の回向を修す。法筵

に列るもの、道俗二十有餘名。結城の菩提所遙正寺の僧德用これを聽いて怒り、結城の家臣長城、堅名、根生野三士と計りて、丶大の一行を襲うて脆くも敗衂し、德用師弟及び三士皆捕はる。

○四月十七日、犬士等能化院の廢趾に結城の老臣小山朝重を迎接す。

○四月下旬、義成開基房州白濱無量山延命院に里見の先代義烈公（季基）の改葬式を行ふ。

文明十五年

○五月初旬、八犬士、丶大照文に伴はれて安房に歸參し義實父子に謁して君臣の誼を結ぶ。

○七月中旬、犬江親兵衛、蜑崎照文を副とし、與四郎紀二六以下を隨へて京都へ發足す。下旬苛子にて海賊に會ふ。八月中旬浪速に着す。八月二十五日八犬士に金碗宿禰の姓を賜ふの宣旨下る二十七日禁裡及び柳營に貢物を獻上す。十月中旬親兵衛武技を角す。十一月下旬歸東の途に就く。十一月二

十六日親兵衛を從六位に叙し兵衛尉に任ずるの宣示下る、親兵衛固辭して受ず。

○十一月下旬定正、大石憲重を說客として諸侯を說く。十一月下旬より十二月二日に渉つて諸侯召に應じて兵を率ゐて五十子に集まる。十二月三日定正、顯定ら軍議を凝らす。十二月五日顯定、成氏等の聯合軍國府臺へ出陣す。

○十二月八日、水陸兩合戰、里見大捷。兩上杉以下聯合軍大敗。

文明十六年

○二月水陸大施餓鬼を行ふ。

○二月初旬、照文正使、祐筆大岸法六郎副使として方物黃白を禁裡及び柳營に獻ずる先例の如し、兩管領以下皆贈遺す。

○三月十六日、京都を出發す、二十八日安房に歸着す。秋篠將曹廣當勅使代として室町殿御使熊谷直親と共に照文と同行安房へ下る。二使は十數日遲れて四月十五日洲崎浦に着す。

○四月二十一日和議整ふ。諸侯より使節來りて各使に十

二將を渡し四城を返還す。成氏の使遲れて到る。義成卽ち信乃その他をして滸我に送らしむ。愈々明日は滸我へ着くといふ前晩、旅館に信乃明日の暇乞ひを述べつゝ、改めて村雨丸を獻して亡父の遺志を果す。

○六月一日、里見及び兩管領以下相模の洋上に會し、京都の兩使を立合として盛んなる和睦の式を擧げ互に誓紙を交換す。

○六月六日早天、京都の兩使洲崎を發向す。八犬士、〻大、照文相俱して禁裡及び柳營に陞位の御禮を奏上するため同行上洛す。

○七月二十日洲崎の浦に歸着す。

○八月十五日、八犬士以下各恩賞を賜ふ。並に八女を賜ふの御内意仰出さる。

○春二月八犬士婚儀を擧ぐ。

○四月十六日義實卒去す。

文明十七年
長享二年

八犬傳餘談

(一)「八犬傳」と私

昔は今ほど忙しくなくて誰でも多少の閑があつたものと見える。所謂大衆物は矢張り相應に流行して讀まれたが、生活が約しかつたのと多少の閑があつたのとで、買ふよりは貸本屋から借りては面白いものは丸寫しか拔寫しをしたものだ。殊に老人のある家では寫本が隱居仕事の一つであつたので、今はもう大抵潰されてしまつたらうが私の青年時代には少し舊い家には大抵お祖父さんか曾祖父さんとかの寫本があつた。これがまた定つて當時の留書とかお觸とか、でなければ大衆物卽ち何とか實錄や著名の戲作の拔寫しであつた。無論何處の貸本屋にも有る珍らしく無いものであつたが、啻だ本の價を儉約するばかりで無く、一つはそれが趣味であつたのだ。私の外曾祖父の家にも（今では大抵屏風の下貼や壁の腰張やハタキや手ふき紙になつてしまつたが）之種の寫本が本箱に四つ五つあつた。その中に馬琴の「美少年錄」や「玉石童子訓」や「朝比奈巡島記」や「俠客傳」があつた。どうしてこんな、そこらに轉がつてる珍しくも無いものを丁寧に寫して、手製とはいへ立派に表紙をつけて保

存する氣になつたのか今日の我々にはその眞理が了解出來ないがつまり馬琴に傾倒した愛讀の情が滔れたからであるといふ外は無い。私の外曾祖父といふは決して戯作好きの方では無かつた。少し常識の桁を外れた男で種々の逸事が殘つてるが、戯作好きだといふ咄は殘つてゐないからそれ程好きでは無かつたらう。事實又、外曾祖父の遺物中には馬琴の外は刊本にも寫本にも小説は一册も無かつた。唯馬琴の作は上記以外自ら謄寫したものが二三種あつた。刊本では「夢想兵衛」と「八犬傳」とが有つた。畢竟するに戯作が好きでは無かつたが、馬琴に限つて愛讀して筆寫の勞をさへ惜まず、「八犬傳」の如き浩瀚のものを左して買書家でも無いのに長期に渉つて出版の都度々々購讀するを忘れなかつたといふは、當時馬琴が戯作を呪ふ間にさへ愛讀といふよりは熟讀されて「八犬傳」が論孟學庸や史記や左傳と同格に扱はれてゐたのを知るべきである。又この外曾祖父が或日の茶話に、馬琴は初め儒者を志ざしたが、當時儒學の宗たる柴野栗山に到底及ばざるを知つて儒者を斷念して戯作の群に投じたのであると語つたのを小耳に挾んで青年の私に吐した老婦人があつた。だが、馬琴が少時栗山に學んだといふ事は「戯作者六家撰」に見えてるが、いつ頃の事か分きりしない。醫を志ざしたといふは自分でも書いてるが、儒を志ざしたといふは餘り聞かない。眞否は頗る疑はしいが、左に右く馬琴の愛讀者たる十流の間にはそんな説があつたものと見える。當時戯作者といへば、一括して輕薄放漫なる瞶々者流として揮蹠された中に單り馬琴が重視されたは學問淵原があるを信ぜられてゐたからで

ある。

私が幼時から親しんでゐた「八犬傳」といふは卽ちこの外曾祖父から傳へられたものだ。出版の都度都度書肆から屆けさしたといふ事で、傳來から云ふと發行卽時の初版であるが現品を見ると三四輯までは初版らしく無い。私の外曾祖父は前にも言ふ通り「美少年錄」でも「俠客傳」でも皆謄寫した氣根の强い筆豆の人であつたから、「八犬傳」も亦初めは寫したに相違ないが、前數作よりも一層感嘆措かなかつたのであらう。それからが出版の都度々々屆けさしたので、初めの分は後から補つたのであらう。私の外曾祖父といふのは戯作好きでも書物好きでも、勿論學者でも文雅風流の嗜みがあるわけでも無い。唯の俗人であつたが、以て馬琴の當時の人氣を推すべきである。

このお庇に私は幼時から馬琴に親んだ。六七歲頃から「八犬傳」の挿繪を反覆して犬士の名ぐらゐは義經辨慶龜井片岡伊勢駿河と共に諳んじてゐた。富山の奥で五人の大の男を手玉に取つた九歲の親兵衛の名は桃太郎や金太郎よりも熟してゐた。隨つてほんたうに通して讀んのだ十二三は歲からだらうがそれより以前から拾ひ讀みにボツ〳〵讀んでゐた。十四歲から十七八歲までの貸本屋學問に最も夢中であつた頃には少くも三遍位は通して讀んだので、その頃は「八犬傳」の何處かゞ三册や四册は缺かさず座右にあつたのだから會心の個處は何遍讀んだか解らない。(私には限らない、當時の貸本屋フワンは誰でもだつたが) 信乃が滸我へ發足する前晩蘋路が忍んで來る一節や、荒芽山の音音の隱

れ家に道節と莊助が邂逅する一條や、返璧の里に雛衣が去られた夫を怨ずる一章は一言一句を剩さず諳記した。が、それ程深く愛誦反覆したのも明治二十一二年頃を最後としてそれから以後は全く一行をだも讀まないで、何十年振で復た讀返すと丁度出稼人が都會の目眩しい町から靜かな田舍の村へ歸つたやうな氣がする。近代の忙だしい騷音や行塞つた苦悶を描いた文藝の鑑賞に馴れた眼で見るとまるで夢を見るやうな心地がするが、有繋にアレだけの人氣を買つた話上手な熟練と、別してドッシリした重味のある力强さを感ぜしめるは古今獨步である。

(二) 「八犬傳」及び失明後終結

「八犬傳」は文化十一年、馬琴四十八歳の春肇輯五册を發行し、連年或は隔年に一輯五册又は六七册宛發梓し、天保十二年七十五歳を以て終結す。その間年を閲する二十八、卷帙百六册の多きに達す。その氣根の大なるは東西古今に倫を絶してゐる。若し啻だ最初の起筆と最後の終結との年次をのみ言ふならばこれより以上の歳月を閲したものもあるが、二十八年間絶えず稿を續けて全く休息した事が無い「八犬傳」の如きは無い。僅に「神稻水滸傳」がこれより以上の年月を費してこれより以上の卷を重ねてゐるが、最初の構案者たる定岡の筆に成るは僅に二篇十册だけであつて爾餘は我が小說史上

餘り認められない作家の續貂狗尾である。尤もアレだけの卷數を重ねたのは矢張り相當の人氣があつたのであらうが、極めて空疎な武勇談を反覆するのみで曲亭の作と同日に語るべきものでは無い。「八犬傳」も亦末尾に近づくに隨つて强弩の末魯縞を穿つ能はざる憾みが些か無いでは無いが、二十八年間の長きに渡つて喜籌に近づき、殊に最後の數年間は眼疾を憂ひ、終に全く失明して口授代筆せしめて完了した苦辛慘憺を思へば構想文字に多少の倦怠のあるは止むを得なからう。左に右く二十八年間同じ精力を持續し、少しもタルミなく日程を追つて最初の立案を（多少の變更或は寄道はあつたかも知れぬが）設計通りに完成終結したといふは餘り聞かない——といふよりは古今に例の無い藝術的勞作であらう。無論、藝術といふは蟻が塔を積むやうに長い歳月を重ねて大きなものを作るばかりが能事ではない。が、この大根氣、大努力も決して算籌外には置かれないので、單にこの點だけでも「八犬傳」を古往今來の大作として馬琴の雄偉なる大手筆を推讃せざるを得ない。

殊に失明後の勞作に到つては尋常藝術的精苦以外に如何なる障碍にも打勝つて益々精進した作者の藝術的意氣の壯んなる眞に尊敬するに餘りがある。馬琴が右眼に故障を生じたのは天保四年六十七歳の八九月頃からであつたが、その時は本より疼痛を伴はなかつたのであらう。餘り問題としなかつたらしい。が、既に右眼の視力を奪はれたからには、霜を踏んで堅氷到るで、左眼も亦何時同じ運命に襲はれるかも計り難いのは豫期されるので、決して無關心ではゐられなかつたらう。それにも拘らず

絶倫の精力を持續して「八犬傳」以外「美少年錄」をも「俠客傳」をも稿を續けて連年舊の如く幾多の新版を市場に送つてをる。その頃はまだ右眼の失明が左したる障碍を與へなかつたらしいのは、例へば岩崎文庫所藏の未刊藁本「禽鏡」の（本文は失明以前の筆寫であつても）失明の翌年の天保五年秋と明記した自筆の識語を見ても解る。筆力が雄健で毫も窘澁の痕が見えないのは右眼の失明が何等累をなさなかつたのであらう。

馬琴は若い時醫を志ざしたので多少は醫者の心得もあつたらしい。醫者の不養生といふほでも無かつたらうが、平生頑健な上に右眼を失つても左して不自由しなかつたので、一つはその頃は碌な町醫者が無かつたからであらう。碌な手當もしないで棄置いたらしい。が不自由しなかつたといふ條、折には眼が翳んだり曇つたりして不安に脅かされてゐたのは「八犬傳」卷後の「回外剩筆」を見ても明かである。曰く、「（戊戌卽ち天保九年の）夏に至りては愈々その異なるを覺えしかども尙悟らず、こは眼鏡の曇りたる故ならめと謬り思ひて、俗に本玉とはいふ水晶製の眼鏡の價貴きをも厭はで此彼と多く購ひ求めて掛替々々凌ぐものから（中略、去歲庚子卽ち天保十一年の）夏に至りて朦々朧々として細字を書く事得ならねばその稿本を五行の大字にしつ、それも手さぐりにて去年の秋九月本傳第九輯四十五の卷まで綴り果し」とあるはその消息を洩らしたしので、口授ではあるが一字一句に血が慘み出してゐる。その續きに「第九輯百七十七回、一顆の智玉、途に一騎の驕將を懲らすといふ一段を

五行或は四行の大字にものしぬるに字行もシドロモドロにて且墨のつかぬ處もありて讀み難しと言へば幷を宅春に補はせなどしぬるほどに十一月に至りては宛ながら雲霧の中に在るが如く、又朧月夜に立つに似て一字も書く事得ならずなりぬ」とて、唯筆硯に不自由するばかりでなく、書畫を見ても見えず、僅に晝夜を辨ずるのみなれば詮方なくて机を退け筆を投げ捨て、嘆息の餘りに「ながらふるかひこそなけれ見えずなりし卷書川に猶わたる世は」と咏じたといふ一節がある。何といふ凄惻の悲史であらう。同じ操觚に携はるものは涙無しには讀む事が出來無い。丁度この百七十七回の中途で文字がシドロモドロとなつて何としても自ら書く事が出來なくなつたといふ原稿は現に早稻田大學の圖書館に遺存してこの文豪の悲痛な消息を物語つてをる。扇谷定正が水軍全滅し僅に身を以て遁れても猶ほ陸上で追詰められ、漸く助友に助けられて河鯉へ落行く條にて、「その馬をしも船に乘せて隊兵——」といふ丁の終りまでシドロモドロながらも自筆であるが、その次の丁からは馬琴の嫁の宗伯未亡人おミチの筆で續けられてゐる。この最終の自筆はシドロモドロで讀辛いが、手摸りにしては形も整つて七行に書かれてゐる。（視力の完全な時は十一行、このアトを續けたおミチのは十行）中には「回外剩筆」にある通り四行五行に大きく、曲りくねつて字間も一定せず、偏と旁が重り合つたり離れ過ぎたりして一見盲人の書いたのが點頭かれるのもある。中には又、手摸りで指の上に書いたと見え、指の痕が白く拔けてるのもある。古今詩人文人の藁本の今に殘存するものは數多くあるが、これほど文

人の悲痛なる藝術的の惱みを味はせるものは無い。

が、悲慘は作者が自ら筆を持つ事が出來なくなつたといふだけで、意氣も文章も氣根も少しも衰へてゐない。右眼が明を失つたのは九輯に差掛つた頃からであるが、馬琴は著書の楮餘に私事を洩らす事が少くないに拘らず、一眼だけを不自由した初期は愚か兩眼共に視力を失つてしまつてからも眼の事は一言も言はなかつた。作者の私生活と交渉の無かつた單なる讀者は最後の「回外剩筆」を讀むまでは恐らく馬琴が盲したのを全く知らなかつたらう。一體が何事にも執念く、些細な日常瑣事にすら餘りクド〳〵言ひ過ぎる難があるが、不思議に失明に就ては思切が宜かつた。「回外剩筆」の視力を失つた過程を述ぶるに方つても、多少の感慨を洩らしつゝも女々しい繰言を繰返さないで、却て意氣の益々軒昂たる本來の剛愎が仄見えてをる。

全く自ら筆を操る事が出來なくなつてからの口授作にも少しも意氣消沈した痕が見えないで相變らずの博引旁證をして氣焔を揚げてをる。馬琴の衒學癖は病膏肓に入つたもので、無知なる田夫野人の口からさへ故事來歴を講釋せしむる事が珍らしくないが、自ら群書を渉獵する事が出來なくなつてからも相變らず和漢の故事を列べ立てるのは得意の羅大經や瑯琊代醉篇が口を衝いて出づるので、その博覽强記が決して俄仕込に非ざるを證して餘りがある。

且つ「八犬傳」の脚色は頗る複雜して事件の經緯は入組んでゐる。加ふるに人物が夫々の歴史や因

緣で結ばれてゐるので、興味に驅られてウカ〳〵讀んでる時は略ぼ輪廓を攫んでるやうに思ふが、細に脈絡を尋ねる時は筋道が交錯してゐて彼我の關係を容易に辨識し難い個處がある。總て複雜した脚色は當の作者自身と雖ども往々混錯して往々迷路に彷徨するは恰も自分の作つたラビリンスに入つて出口を忘れるやうなものだ。一度死んだ人間を無理に蘇生らしたり、まだ生きてゐる筈の人間がいつの間にか何處かへ消えてしまつたり、一つ人間の性格が何遍も變るのは有勝で、然うしなければ纏りが附かなくなるからだ。正直に平たく白狀さしたなら自分の作つた脚色を餅に搗いた經驗の無い作者は殆ど無からう。長篇小說の多くが尻切蜻蜓である原因の過半はこれである。二十八年の長きに亙つて當初の立案通りの過程を追つて脚色の上に少しも矛盾撞着を生ぜしめなかつたのは稀に見る例で、作者の頭腦の明澄透徹を證據立てる。殊に視力を失つて單なる記憶に賴る外無くなつてからでも毫も混錯しないで、一々個々の筋道を分けで各々結末を着けたのは例へば名將の隊伍を整へて軍を收むるが如くである。第九輯卷四十九以下は全篇の結末を着けるためであるから勢ひダレる氣味があつて往往閑却されるが、例へば信乃が故主成氏の俘はれを釋かれて國へ歸るを送つて愈々明日は別れるといふ前夕、故主に謁して折柄のそぼ降る雨の徒々を慰めつゝ改めて寶劍を献じて亡父の志を果す一條の如き大塚匠作父子の孤忠及び芳流閣の終曲として餘情嫋々たる限りなき詩趣がある。又例へば金光寺門前の狐龍の化石（第九輯卷五十一）延命院の牡丹の辯（同五十二）の如き馬琴の得意の涅覓論で

あるが、馬琴としては因縁因果の解決を與へたのである。馬琴の人生觀や宇宙觀の批評は別問題として、「八犬傳」は馬琴の哲學諸相を綜合具象した馬琴宗の根本經典である。

(三)「八犬傳」總括評

だが、有體に平たく言ふと、初めから二十八年と豫定して稿を起したのでは無い。讀者の限り無い人氣に引摺られて次第に延長したので、アレほど彩大な案を立てたので無いのはその卷數の分け方を見ても明かである。本來讀本は各輯五冊で追つて行くを通則とする。「八犬傳」も五冊までは通則通りであつたが、六輯は一冊增して六冊、七輯は一冊加へて七冊、八輯は一度に三冊を加へて十冊とした。九輯となると上中下の三帙を豫定し、上帙六冊、中帙七冊、下帙は更に二分して上下兩帙の十冊とした。それでもマダ完結とならないので以下は順次に卷數を追ふことにした。若し初めからアレだけ卷數を重ねる豫定があつたなら一輯五冊と正確に定めて十輯十一輯と輯の順番を追つて行く筈で、九輯の上だの下だの更に下の上だの下の下だのと小面倒な細工をしないでも宜かつたらうと思ふ。全部を二分して最初の半分が一輯より八輯まで、後の半分が總九輯といふやうなコンナ馬鹿々々しい卷數附けは「八犬傳」以外には無い。これといふのは畢竟モウ五冊もう三冊と、次第に後を引摺られて

據なしに卷數を增したと見る外は無い。

例へば親兵衞が京都へ使ひする一條の如き全く省いても差支無い贅疣である。結城以後影を隱した德用堅削を再出して僅に連絡を保たしめる外には少しも本文に連鎖の無い獨立した武勇談である。第九輯卷二十九の卷初に馬琴が特にこの京都の物語を決して無用に非ざるを强辯するは當時既に無用論があつたものと見える。一體親兵衞は少年といふより幼年といふが可なる程の最少年者であつて、豪傑として描出するには年齡上無理がある。勢ひ靈玉の奇特や伏姫神の神助が矢鱈と出るので、親兵衞武勇談は稍もすれば伏姫靈驗記になる。他の犬士の物語と比べて人間味が著るしく稀薄であるが、殊に京都の物語巽風於菟子の一節を除いては極めて空虛な少年武勇傳である。

本來「八犬傳」は百七十一回の八犬具足を以て終結と見るが當然である。馬琴が聖嘆の七十回本「水滸傳」を難じて、水滸の豪傑が若し方臘を伐つて宋朝に功を立てる後談が無かつたら「水滸傳」は唯の山賊物語となつてしまふと論じた筆法をそのまゝ適用すると、「八犬傳」も八犬具足で終つて、兩管領との大戰爭に及ばなかつたら矢張り唯の浮浪物語であつて馬琴の小說觀からは恐らく有終の美を成さざる憾みがあらう。然ういふ道學的小說觀は今日では最早問題にならないが、爲永春水輩でさへが貞操や家庭の團欒の敎師を保護色とした時代に、馬琴ともあるものが唯の浮浪生活を描いたのでは少くも愛讀者たる士君子に對して申譯が立たないから勳功記を加へて以て完璧たらしめたのであら

う。が、「八犬傳」の興味は穂北の四犬士の邂逅、船蟲の牛裂、五十子の燒打で最頂に達してゐるので、八犬具足で終つてゐのは、馬琴と雖どもこれを知らざる筈は無い。畢竟するに馬琴が頻りに水滸の聖嘆評難詰を屢々するは水滸を借りて自ら辯明するのではあるまい乎。

だが、この兩管領との合戰記は馬琴が失明後の口授作にもせよ、水滸傳や三國誌や戰國策を襲踏した痕が餘りに歴々として「八犬傳」中最も拙陋を極めてゐる。一體馬琴は史筆椽大を以て稱されてゐるが、矢張り大まかな荒つぽい軍記物よりは情緒細やかな人情物に長じてをる。線の太い歴史物よりは「南柯夢」や「旬傳實々記」のやうな心中物に細かい纖巧な技術を示してをる。「八犬傳」でも濱路や羅衣の口說が稱讃されてるのは强ち文章のためばかりでは無い。戰記となるとまるで成つてゐない。下手な修羅場讀と同樣唯道具立を列べるのみである。葛西金町を中心としての野戰の如き彼我の五六の大將が頻りに一騎打の勇戰をしてゐるが、上杉、長尾、滸我等を合すれば可成りな兵數になる軍勢は一體何をしてゐたのか、喊の聲さへ擧げてゐないやうだ。その頃はもう可成り戰術が開けて來たのだが大將株が各自に自由行動を取つてゐて軍隊なぞは有るのか無いのか解らない。これに對抗する里見勢も相當の數だらうが、ドダイ安房から墨田河原近くの戰線まで可成りな道程を何時どういふ風に引率して來たのやらそれからして一行も書いてない。水軍の策戰は三國誌の赤壁をソックリその儘に踏襲したので、里見の天海たるゝ大や防禦使の大角まで引張出して幕下でも勤まる端役を振當てた

下拵へは大掛りだが、肝腎の合戰は音音が仁田山晋六の船を燔いたのが一番壯烈で、數千の兵船を燒いたといふが兒供の水鐵砲位の感じしか與へない。扇谷家第一の猛者小幡東良が能登守敎經然たる働きをする外は里見勢も上杉勢も根ッから動いてゐない。定正がアッチへ逃げたりコッチへ逃げたりするのも曹操が周瑜に追はれては孔明の智なきを笑ふ度に伏兵が起る如き巧妙な作才が無い。軍記物語の作者としての馬琴は到底三國誌の著者の沓の紐を解くの力も無い。とは言ふものゝ「八犬傳」の舞臺をして規模雄大の感あらしめるのはこの兩管領との合戰記であるから、最後の幕を飾る場面として滿更無用で無いかも知れない。

が「八犬傳」は前にも言ふ通り第八輯で最高頂に達し、第九輯卷二十一の百三十一回の八犬具足で終つてゐる。それより以下は八犬後談で切離すべきである。(私の梗概がその以下に及ばないのはこの理由からである)「八犬傳」の本道は大塚から市川行徳荒芽山と迂廻して穂北へ達する一線である。その中心點が大塚と行徳と荒芽山である。野州路や越後路はその裏道で甲斐の石和や武藏の石濱は横道である。富山や京都は全く別系統であつて、富山が八犬の發祥地である外には何の連鎖も無い。地理的に言へば、大塚と行徳と荒芽との三地點から繩を引張つた三角帶が「八犬傳」の本舞臺であつてこの本舞臺に登場しない犬江(親兵衞は行徳に顏を出すがまだ子役であつて一人前になつてゐない)犬村犬坂の三犬士は役割からは寧ろヌケ役である。就中、その中心となるのは信乃と道節とで、「八

犬傳」中最も興味の深い主要の役目を勤めるのは常にこの二人である。

一體八犬士は餘り完全過ぎる。水滸傳中には鷄を盗むを得意とする時遷のやうな雜輩を除いても黑旋風のやうな怒つて亂暴する外には取柄の無い愚人もあるが、八犬士は皆文武の才があつて、智慮分別があり過ぎる。その中で道節が短氣で粗忽で一番人間味がある。一生定正を父君の仇と覘つて二度も失敗なつてゐる。里見の防禦使となつて堂々對敵しても逃路に待伏せする野武士のやうな役目を振られてシカモ首尾よく取逃がして小水門目輩に孺子をして名を成さしめてる。何をやらしてもヘマばかりする處に道節の人間味がある。道節を除いては小文吾が曳手單節を送つて途中で二人を乘せた馬に駈出されて見失つてしまつたり、荒野猪を踏殺して牙に掛けられた獵師を助けたはいゝが恩を仇の泥坊獵師の女房にコロリと一杯喰つてアベコベにフン縛られる田舍相撲らしい總身に智慧の廻り兼ねるドヂを時々踏む外は皆餘りに出來過ぎてゐる。就中、親兵衞に到つて極まる。

「八犬傳」には幾多の興味ある挿話がある。例へば船蟲の一生の如き、單なる一挿話とするには惜しい話材である。初めは行暮れた浪人を泊らしては路銀を竊む惡獵師の女房、次には媳いびりの猫化鄕士の妻、三轉して追剝の女房の女按摩となり、最後に折助の嬶となつて亭主と馴れ合ひに賊を働く夜鷹となり、牛裂の私刑に波瀾の多い一生の幕を閉ぢる一種の變態性格である。これだけでも一部の小說とするに足る。又例へば素藤の如き、妙椿が現れて幻術で助けるやうになつてはツマラ無いが、

浮浪の盜賊から左に右く一城の主となつた徑路には梟雄の智略がある。妙椿の指金で里見に緣談を申込むやうになつては愚慢の大將であるが、里見を初め附近の城主を籠罩して城主の位置を承認せしめたは尋常草賊の智慧では無い。馬琴は兎角に忠孝の講釋をするので道學先生視されて、小說を忌む鴆毒に等しい文藝憎惡者にも馬琴だけは除外例になつて感服されてるが、焉ぞ知らん馬琴は忠臣孝子よりは惡漢淫婦を描くより以上の老熟を示してをる。「美少年錄」が（未完成ではあるが）代表作の一つである「弓張月」よりも却つて成功してゐるはその一例である。

（四）「八犬傳」の歷史地理

馬琴は博覽强記を稱されもすれば自ら任じもした。殊に歷史地理の考證に就ては該博精透なる尋究を以て聞えてゐた。正當なる歷史を標榜する史籍さへ往々不穿鑿なる史實を傳へて毫も怪まない時代であるから、況してや稗官野乘が好い加減な出鱈目を列べるのも少しも不思議は無い。馬琴自身が決して歷史の參考書として小說を作つたので無いのは明かで、多少の歷史上の錯誤があつたからとて何等文藝上の價値を累するに足らないのである。馬琴の作が考證精覈で歷史上又は地理上の調査が行屆いてるなどと感服するのは贔屓の引倒しで、馬琴に取つてはこの上も無い難有迷惑であらう。唯馬琴

は平素の博覽癖から何事も精しく調査したらしく思はれる處に損もあり得もある。「房總史料」を唯一の手品の種子箱とする「八犬傳」の歴史地理の穿鑿の如きは抑も言ふもの、誤りである。餘り偏痴氣論を振廻したくないが、世間には存外な贔屓の引倒しもあるから、唯一個條悄まれ口を叩いて置かう。（無論「八犬傳」の光輝はそんな大向うの半疊で曇らされるのでは無い）

金碗大輔が八房諸侶伏姫をも二つ玉で撃留めたのはこの長物語の序開きをするセラエヴオの一發となつてるが、日本へ鐵砲が傳來したのが天文十二年であるは小學校の教科書にも載つてる。尤も天文十二年説は疑問で、數年前にも數回歴史家の間に論爭されたが、縱令その以前に渡つたものがあつたにしてもそれより凡そ八十年前の（伏姫が死んだ年の）長祿の二年に房州の田舍武士の金碗大輔が何處から鐵砲を手に入れたらう。これを始めに「八犬傳」には餘り頻繁に鐵砲が出過ぎる。白井の城下で道節が上杉勢に圍まれた時も鐵砲足輕が筒を揃へて道節に迫つた。曳手單節が荒芽山を落ちる時も野武士に鐵砲で追はれた。網苧の鵜平茶屋にも鐵砲が掛けてあつた。甲斐の石和の山の中で莊官木工作が泡雪奈四郎に鐵砲で射殺された。大詰の大戰爭の駢馬三聯車も人を驚かせるが、この踊野臺然たる戰車の上に六人の銃手が銃口を揃へてゐのは凄まじい。天下の管領の軍隊だから葡萄牙人よりも先に何百挺何千挺の鐵砲を輸入しても妨げないが、野武士や追剝まで鐵砲をポン〳〵撃つのは餘り無鐵砲過ぎる。網苧の山里の立場茶屋に威嚇しの鐵砲が用意してあるほどなら、道節も寶刀を捻くり廻し

て居合拔の口上のやうな駄辯を弄して定正に近づかうとするよりもズドンと一發ブッ放した方が餘程早手廻しだつたらう。

恁ういふと偏痴氣論になる。小説だもの、饅七が辨慶の長上下で貧乏德利をブラ下げて入鹿御殿に管を卷かうと、芝居や小説に一々歴史を持出すのは餘程な大白癡で、「八犬傳」の鐵砲も亦問題にならない。が、ウソらしいウソは問題にならないがほんたうらしく聞えるウソは小説だと思つても欺されるから問題になる。辨慶の七つ道具の中にピストルがあつたと言つても誰も問題にしないが、長祿に安房の田舍武士が鐵砲を持つてゐたといふと一寸首を傾げさせる。況んや説話者が博覽の穿鑿好きたる馬琴であるから、眉に唾をつけながらも考へさせられる。

鐵砲は暫らくお預けとして、長祿といふと太田道灌が江戸城を築いた年である。「八犬傳」には道灌は影になつてるが、道灌の子の助友は度々顔を出してゐる。江戸は「八犬傳」の中心舞臺で、信乃が生れ額藏が育つた大塚を外にしても神田とか湯嶋とか本郷とかいふ地名は出るが「江戸」といふ地名は見えない。江戸城を匂はせるやうな城も見えない。兩管領との大戰爭に里見方は石濱、五十子、忍ヶ岡、大塚の四城は落してゐるが、その地理的位置が江戸城を懷はせるやうなのは無い。尤も江戸城などは有つても無くても「八犬傳」の本筋には少しも關係しないが、考證好きの馬琴が代る〴〵に犬士をこの地方に遍歴らさして置いて江戸城を見落さしたのを不思議に思ふ。

前にも言つたが「八犬傳」の中心舞臺は安房よりも江戸であつて、事件が多くは江戸或は江戸人に親しみのある近國で發展したのが少くも中央都人士の興味を湧かさした一つの原因である。殊に一番人氣のある信乃を主役として五犬士の活躍するは大塚を本舞臺として巣鴨、池袋、瀧の川、王子、本郷に跨がる半圓體で、我々郊外生活者の遊歩區域が卽ち「八犬傳」の名所舊蹟である。一體大塚城といふのは何處にあつたらう？　そんな問題を出すのが抑も野暮のドン詰りであるが、もと〳〵城主の大石といふのが定正の大稗將であるから、城と稱するが實は陣屋であらう。所謂「飯盛も陣屋ぐらゐは傾ける」程度の飯盛相當の城であらう。處で、城にしろ陣屋にしろ何の邊であるか見當が附かぬが信乃が幼時を過した大塚は、信乃の家の飼犬が囓殺した伯母の龜篠の祕藏猫に因んで橋名を附けられたと作者が考證する氷川の猫股橋といふのが近所であるから、それから推して氷川田圃に近い、今の地理的考證から措して氷川田圃に近き今の高等師範の近邊であらう。莊助の額藏が處刑されようとした庚申塚の刑場も近く、信乃の母が瀧ノ川の岩屋へ日參したといふ事蹟から考へても高等師範近所と判斷するが當つてゐるだらう。

處で信乃が愈々明日は滸我へ旅立つといふ前晩、川狩へ行つて蟇六の詭計に陷められて危なく川底へ沈められようとし、左母二郎に寶刀を摩替へられるに至つた神宮川といふは古名であるか、それとも別に依據のある假作名であるか、一體何處を指すのであらう。信乃が瀧ノ川の辨天へ參詣した歸路

に偶然邂逅つたやうに趣向したといふのだから、瀧ノ川近くでなければならないので、多分荒川の小臺の渡し近邊であらう。假りに然う定めて置いて、大塚から點燈頃にテク〳〵荒川くんだりまで出かけ、水の中で命のやりとりの大芝居をして歸つたのが亥の刻過ぎたといふから十時である。往返をマラソンでヘビーを掛け、水中の實演を餘程高速度で埒を明けなければ、とても十時には歸つて來られない。が荒川より近くには神宮川のやうな大きな川は無い。

道節が火定に入つた圓塚山といふは名稱の類似から本郷の丸山だらうともいふし、大學の構内の御殿の邊だらうといふ臆說もある。ドッチにしても本が小說だから勝手な臆測が許されるが、左母二郎が濱路を誘拐して駕籠を飛ばして來たは大塚から眞直ぐに小石川の通りを富坂へ出て菊坂あたりから板橋街道へ出たものらしい。圓塚山はこの街道筋に在るので、今の燕樂軒から白十字、パラダイス、鉢の木が軒を竝べるあたりが道節の寂寞道人肩柳や濱路の史跡である。小說の史跡を論ずるのは極樂の名所圖會や龍宮の案内記を書くやうなものだが、現にお里の鈎瓶鮨のあとも今猶ほ連綿として殘り樋口の十郎兼光の逆櫓の松も榮え、壷坂では先年澤市の何百年遠忌だかを營んだ。「八犬傳」の史蹟も石に勒して建てられる時があるかも知れない。（市川附近や安房の富山には「八犬傳」の遺跡と傳へられる處が既に在るといふ咄だ）

が、然ういふ空想史蹟は暫らく措いて、單なる地理的興味から見て頗る味ふべきものが屢々有る。

小文吾が荒猪を踏殺したのは鳥越であるが、鳥越は私が物心覺えてから可成り人家の密集した町である。德川以前、足利の末造にもせよ、近くに山も無いに野猪が飛出すか知らん。（尤も「十方庵遊歴雜記」に向嶋の弘福寺の境内寂寞として唯野猿の聲を聞くといふ記事があるが、奥山の猿芝居の猿の聲では無ささうだ）又この鳥越から海が見えるといふ記事がある。湯嶋の高臺からは海が見えるから、人家まばらに草茫々と目に遮るものも無い、その頃の鳥越からは海が見えたかも知れぬが、一寸異な感じがする。

芳流閣の屋根から信乃と現八とが組打して小舟の中に轉がり落ち、機勢に舫綱が切れて行德へ流れるといふに就て、滸我、卽ち古賀からは行德へ流れて來ないといふ說がある。利根の一本筋だから引汐なら行德へ流れないとも限らないが、古賀から行德までは可成りな距離があつて水路が彎曲してゐる。その上に中途の關宿には關所が設けられて船舶の出入に嚴重であつたから、大抵な流れ舟は爰で抑留される。左も無くとも川は曲りくねつて蘆荻が岸に密生してゐるから小さな舟は途中で引掛つてしまふ。到底無事に行德まで流れて來さうも無い。

夷灣の館山（素藤の居城）といふは今も同じ地名の布施村か國府臺に近接する立山であらう。稻村までは可成りの里程があつて、「八犬傳」でも一泊二日路であるが、妙椿が濱路を誘するに幻術で雲にでも乘つて來たら宜ささうなもんだのに小脇に引抱へてズルんか〳〵〳〵引摺つて來て南彌六に邪

魔をされ折角誘拐して來た濱路を伏姫神靈に取返される。素藤が初め捕はれて再擧を謀る間潛伏した山といふはどの邊を指すか解らぬが、夷灣は海岸を除いては全郡山地であるが山が惣て淺くて且つ低くて人跡未到といふやうな感じのある處は無ささうだ。房總は總て馬の脊のやうな地形で、山脈が連亙して中央部を走つてゐるが、高山も大山も無い。伏姫が山入した富山（トミサンと呼ぶ、トヤマでもトミヤマでも無い）の如きも「八犬傳」に形容されてるやうな高峻な山では無い。最高峰の觀音堂は「八犬傳」に由ると義實の建立となつてるが、寺記には孝謙天皇の御造立となつてゐる。安房は國史には可成り古いが、德川氏が江戸を開く以前は中央首都から遠い邊陲の半嶋であつたから極めて歷史に乏しく、隨つて漁業地としての外は餘り認められてゐない。安房が著名になつたのは全く「八犬傳」以來であるから「八犬傳」の舊蹟は準史蹟として見てもかいゝも知れない。

（「八犬傳」の地理學は起稿當初の腹案であつたが、實地を踏査しなければ解らぬ個處が存外多いので總て他日の機會に讓る事にした。八犬傳地圖も添ゆる豫定であつたが、同じ理由で。）

（五）馬琴の日記

「八犬傳」が日本の小說中飛離れて挺んでてゐる如く、馬琴の人物も亦嶄然として卓出してゐる。兎

角の評はあつても馬琴の如く自ら信ずる處厚く、天下の師を以て任じたのは他には無い。古今作者を列べて著述の量の多いのと、就中大作に富めると、その作の規模結構の大なると、その態度の嚴肅なるとその識見の高邁なると、能く馬琴に企て及ぶものは殆んで無い。

が、作に秀でたのは、鯛よりは鰯の生きのいゝ方が旨い、牡丹よりは菜の花の方が風情があるといふと同じ好き不好きを別として大抵異論は無いが、人物となると又、古今馬琴の如く嫌はれてるのは少ない。或る雜誌で、古今文人の好き嫌ひといふ題で現代文人の答案を求めたに對し、大抵な人が馬琴を嫌ひといふに一致し、馬琴を好きと答へたものは一人も無かつた。啻に現代人のみならず、その當時からして馬琴は嫌はれてゐた。正面から馬琴に怨聲を放つて挑戰したのは京山一人であつたが、少くも馬琴が作者間に孤立してゐて餘り交際しなかつた一事に徵するも馬琴に對して餘り好感を持つものが無かつたのは推測られる。馬琴が交際してゐたのは同じ作者仲間よりは寧ろ愛讀者、殊に遠方の文書で交際する殿村篠齋の連中であつて親しくその家に出入して敎を乞ふもので無かつた。唯文書を以て交際するだけなら折々小面倒で嫌氣を生ずる事があつてもそれほど深く身に染みないが、面と向つては容易に親しまれないで、小難かしくて氣ブッセイで堪へられなかつたらう。兎角に氣難かしくて機嫌の取り惡かつたのは家人からでさへ餘り喜ばれなかつたのを以てもその人となりを知るべきである。

京傳と仲たがひした眞因は判然しないが、京山の「蜘蛛の絲卷」、馬琴の「伊波傳毛之記」及び「作者部類」を照合はして見ると、彼我の言ふ處（多少の身勝手や世間體を飾つた自己辯護はあつても）皆眞實であらう。馬琴が京傳や蔦重の家を轉々して食客となり處女作「盡用而二分狂言」に京傳門人大柴山人と署したは蔽ひ難い。僅か三歲でも年長者であるし、その時既に相應の名を成してゐたから作者として世間へ乘出すには多少の力を仰いだ事は有らうが、著作上敎へられる事が餘り多く有つたとは思はれない。京傳門人と署したのは衣食の世話になつた先輩に對する禮儀であつて、師禮を執つて敎を受けた關係で無かつたのは容易に想像される。文關番が主人を先生と呼ぶやうなものだ。尤も一字の師恩、一飯の恩といふ事もあり、主從師弟の嚴ましかつた時代だから、兩者の關係が漸く疏隔して馬琴の盛名がオサ〳〵京傳を凌がんとすると、京傳側が餘り快く思はぬは無理も無いが、馬琴が京傳に賴つた頃の何十年も昔しの內輪咄を剔抉いて恩人風を吹かし、人倫とは言ひ難しとまで京山が罵るのは決して穩かで無い。小身であつても武家奉公をし醫を志ざした馬琴である。下駄屋の入夫を嫌つて千蔭に入門して習字の師匠となつた馬琴である。その頃は最う黃表紙時代と變つて同じ戲作の筆を執つてゐても自作に漢文の序文を書き漢詩の像讚をした見識であつたから、昔を忘れたのは餘り褒められないが幇間藝人に伍する作者の仲間入りを屑しとしなかつたのは萬更無理は無かつた。馬琴に限らず風來なども戲作に遊んだが作者の仲間附合はしなかつたので、多少の見識あるものは當

時の作者の仲間入を欲しなかつたのみならず作者からも亦仲間外れにされたのである。

だが、馬琴は出身の當初から京傳を敵手と見て競爭してゐたので、群小作者を下目に見てゐても京傳の勝れた作才には一目置いてゐた。「作者部類」に、あの自尊心の強い馬琴が自ら「臭草紙は馬琴、京傳に及ばず、讀本は京傳、馬琴に及ばず」と案外公平な評をしてゐるのは馬琴が一歩讓る處があつたからだらう。それと同樣「蜘蛛の絲卷」に馬琴を出藍の才子と稱し、「讀本といふもの、天和の西鶴に起り、自笑其磧、寶永正德に鳴りしが馬琴には三舍すべし」と京傳側を代表する京山が、これも亦案外公平な說を立てゝるのは京傳馬琴が兩々相對して下らざる互角の雄と見做したのが當時の公論であつたのだらう。二人は遠く離れて睨み合つてゐても天下の英雄は使君と操とのみと互に相許してゐたに違ひない。が、京傳は文化十三年馬琴に先んじて死し、馬琴はそれ以後「八犬傳」の卷を重ねて愈々文名を高くし、京傳に及ばずと自ら認めた臭草紙でも「傾城水滸傳」や「金毘羅船」のやうな名篇を續出して盛名最早京傳の論では無くなつてゐる。馬琴としては區々世評の如きは褒貶共に超越して顧みないでも、譬へば北辰その所に居て衆星これを繞るが如くであるべきである。それにも拘らず兎角に自己を擧げて京傳を貶する如き口吻を洩らすは京山の言ふ如く全くこの人にしてこの病ありでこの一癖が馬琴の鼎の輕重を問はしめる。

馬琴の人物行狀の巨細を知るには渠の生活記錄たる日記がある。この日記はいつ頃から附け始めい

つ頃で終つてるか知らぬが、今殘つてるのは晩年の分である。あの筆豆から推せば若い時から附けてゐたに違ひないが、先年馬琴の家から一と纏めに某氏の手へ渡つた自筆文書の中には若い時の日記は無い。この分は今、全部早稻田圖書館に移管されてゐる。震災に亡びた帝大圖書館のは何處から買入れたか出所來歷を知らぬがそれより以前に瀧澤家から出たものらしい。まだその外にも散逸したものが何處かに殘つてると思ふが所在を明かにしない。帝大のは偶然館外に貸出してあつた一冊が震火を免れて今殘つてゐる。この一冊と早大圖書館所藏本とが今殘つてる馬琴日記の全部である。この早稻田本を早大に移る以前に抄錄解說したのが饗庭篁村氏の「馬琴日記抄」であつて、天保二年の分を全冊轉印されたのが和田萬吉氏の「馬琴日記」(原本燒失)である。

饗庭氏の抄錄本若くは和田氏の校訂本に由て馬琴の日記を讀んだものは、誰でもその記載の事項が細大洩らさず綿密に認められたのを驚嘆せずにはゐられない。毎日の天候氣溫、出入客來、他出等、尋常日記に載すべき事項の外に祭事、佛事、音物、到來品、買物、近親交友間の消息、來客の用談世間咄、出入商人職人等の近事、奉公人の移り換、給金の前渡しや貸越や、慶庵や請人の不埒、鼠が天井で騷ぐ困り咄、隣りの猫に殺を取られた不平咄、毎日の出來事を些細の問題まで洗ひざらひ落なく書上げてゐる。殊に原本は十五六行の蠅頭細字で認めた一年一冊凡そ百餘張の半紙本である。あれだけの著述をした上にこれだけの丹念な日記を毎日怠らず附けた氣根の強さ加減は驚くに餘りある。日

記その物が馬琴の精力絶倫を語つてをる。

更にその内容を檢すると、馬琴が日常の極めて些細な問題にまで、一々重箱の隅をホジクルやうな小理窟を列べてこだはる氣難かし屋であるに驚く。それもいゝが、いつまでもサッパリしないでネチネチと際限なくごてゝる。唯讀んでさへ七六かしいのに弱らせられるんだから、あの氣難かし屋に捉つたら災難だ。頭からガミ〳〵と叱られるなら我慢し易いが、ネチ〳〵とトロ火で油煎されるやうに痛めつけられたら精も根も竭きて節々までグタ〳〵になつてしまふと、恐れを成さずにはゐられまい。馬琴がアレだけの學問技能を抱いて、アレだけの大仕事をして、アレだけの愛讀者、崇拜者を持ちながら近づくものが少なくして孤立したのはあの氣難かし屋からである。馬琴の剛愎高慢は名代のもので、同時代のものは皆人も無げなる態度に腹を立つたものださうだが、剛愎高慢は威張らして置けば濟むから却つて御し易いが、些細な問題に一々角を立てゝその上に何時までも根に葉に持つてゐられたり、或は意地惡婆さんの嫁いびりのやうにネチ〳〵チク〳〵とやられては迚も助からない。和田君の校訂本を讀んだものは誰も直ぐ氣が付くが、馬琴の家の下婢の出代りの頻繁なのは殆んど應接に遑あらずだ。その度毎に給金の前渡しや貸越が必ず附帶する。それんばかしの金を吳れてしまつたらと思ふが馬琴は寸毫も假借しない。一々請人を呼びつけて嚴重に談じつける。鄙吝でもあつたらうが、鄙吝よりは下女風情に甘く嘗められてはといふ難かし屋の理窟屋の腹の蟲が承知しないのだ。一體馬

琴の女房のお百といふが中々の難物らしかつたが、その上に主翁の馬琴が偏屈人の小言幸兵衛と來ては女中の尻の据らなかつたのも無理は無い。馬琴の家庭は日記の上では一年中低氣壓に脅かされ通して、春風駘蕩といふやうな長閑なユックリとした日は一日も無かつたやうだ。老妻お百と娘のお道との三角葛藤は屢々問題となるが、馬琴に後暮い弱點が無くとも一家の主人が些細な家事にまであゝ七六かしい理窟を凝ねるやうでは家が悶める。馬琴は啻に他人ばかりでなく家族にさへも餘り喜ばれなかつた苛細冷酷な偏屈者であつた。

一言すれば理窟ばかりで、面白味も溫味も無い冷たい重苦しい感じのする人物だつた。世事も愛嬌も無いブッキラ棒な無愛想な男だつた。崇拜者も相應に多くて、遙々遠方から會ひに來る人もあつたが、木で鼻を括つたやうな態度で面白くも無い講釋を聞かされ、罷り間違へば叱言を喰つたり揚足を取られたりするから一度で懲り〳〵してしまふ。アレだけ綿密につけた日記に來客と共に愉快さうに談笑した記事が殆ど見え無い。家族と一緒に遊びに出かけたは魯か、在宿して團欒の歡樂に興じた記事も亦見えない。馬琴は二六時中操觚に沒頭するか、讀書に耽るかして殆ど机に向つたきりで、家人と世間咄一つせず、叱言をいふ時の外は餘り口を利かなかつたらしい。

家人に對してさへこれだから、況してや他人に對して上手を言ふやうな事は無かつた。「蜘蛛の絲卷」に、恩人の京傳の葬式には僅かばかりの香料を包んで代理に持たせて、自分は顏を出さなかつ

た癖に、自分が書畫會をする時には自筆の扇子を持つて叩頭に來たと、馬琴の義理知らずと罵つてゐる。が、葬式の一條は左も右く、自分の得になつても叩頭をする事の大嫌ひな馬琴が叩頭に來たといふは滅多に無い珍らしい事だ。つまり世渡り下手で少しもお上手を知らなかつたので、強ち義理知らずばかりでも無かつた。

一口に言ふと馬琴は無調法者だつた。口前の上手な事をいふのは出來なかつたよりも持前の剛愎が許さなかつた。人の感情を毀すなぞ餘り問題にしなかつたから、人と衝突するのは馬琴の生涯には珍らしくなかつた。これにつき京傳と馬琴との性格の差を現はす一例がある。京傳も亦相當な見識を具へて一癖も二癖も有つたが、根が町家生れで如才無く、馬琴と違つて酸いも甘いも心得た通人だつたから人を外らすやうな事は決して做なかつた。「優曇華物語」の喜多武清の挿畫が讀者受けがしないで人氣が引立たなかつた跡を豐國に頼んで「櫻姫全傳」が評判になると、京傳は自分の作が評判されるのは全く挿繪のお庇だと卑下して、繪が主、作が從だと豐國を持上げ、豐國繪、京傳作と卷尾の署名順を顚倒さした。事實、臭草紙は勿論、讀本にしても挿繪の巧拙善惡が人氣に關するが、獨立した繪本と違つて挿畫は本文に從屬するのみならず、圖柄の意匠配置等は通例作者の指揮に待つを常とするから畫家は從位にあつて主位に居るべきものでは無い。豐國の似而非高慢が世間の評判を自分の手柄に獨占しようとするは無知な畫家の增長慢として有りさうな咄だ。が、京傳は畫工が威張りたいな

ら威張らして置いて署名の順位の如きは餘り問題にしなかつた。

馬琴はこれに反して畫家の我儘を決して許さなかつた。馬琴は初め北齋と結托して馬琴の挿畫は北齋が描くを例とした。處が「弓張月」だつたか「水滸畫傳」だつたかの時、無論酒の上の元氣か何かであらう、馬琴の本が賣れるのは俺の挿畫が巧いからだと北齋が傲語した。さア、馬琴が承知しない俺の本の挿畫を描かせるから人からヤレコレ言はれるやうになつたのを忘れたかと、それぎり二人は背中合せとなつた。ドッチも鼻梁の強い負嫌ひの天狗同志だから衝突するのは無理は無い。京傳だつたら北齋に花を持たして綺麗に負けてやつたらう。

が、馬琴には綺麗サッパリと讓つてやる襟度が缺けてゐた。奉公人にさへ勘辨出來ないで、些細な不行屆にすら請人を呼付けてキウ〳〵談じつけなければ腹の蟲が慰なかつたのだから、肝癖の殿樣の御機嫌を取るつもりでゐるもので無ければ誰とでも衝突した。一つは馬琴の人物が市井の町家の型に適らず、戲作者仲間の空氣とも、容れなかつたからであらう。馬琴が蒲生君平や渡邊崋山と交際したのはそれ程深い親密な關係では無かつたらうが、町家の作者仲間よりは恁ういふ士人階級の方が却つて意氣投合したらしい。が、君平や華山と屢々音信した一事からして馬琴に勤王の志があつたと推斷するのは馬琴最眉が箔をつけようための牽强說である。ついこの頃も或雜誌で考證されてゐたが、恁ういふ臆斷は浪花節が好きだから右傾、小劇場の常連だから左傾と、臆測するよりも最つと早呑込

過ぎる。

（六）「八犬傳」の人物咏題

が、馬琴の人物がどうあらうとも作家として日本が生み出した最大者であるは何人も異議を挾むを許されない公論である。「八犬傳」が亦啻に馬琴の最大作であるのみならず、日本に在つては量に於ても質に於ても他に比儔するものゝ無い最大傑作であるは動かすべからざる定說である。京傳馬琴と便宜上竝稱するものゝ實は一列に見難いものである。沙翁は文人として英國のみならず世界の最大の名で、その作は上下を通じて洽く讀まれ、ハムレットやマクベスの名は沙翁の傳記の一行をだも讀まないものにも諳んぜられてゐる。日本で沙翁と推される作物の性質上近松巢林子であつて、近松は實に馬琴と駢んで日本の最大者である。が、近松の作の人物が洽く知られてゐるは舞臺に上せられて知られたので、その作が洽く讀まれてゐるからでは無い。「八犬傳」はこれに反してその作が洽く讀まれて誰にも知られてゐるから、淨瑠璃ともなれば芝居ともなつたのである。恐らく古今を通じて斯の如く廣く讀まれ、斯の如く傳唱されてるのは比類無からう。隨つて「八犬傳」の人物は全く作者の空想の產物で、歷史上又は傳說上の名、或は街談口說の舌頭に上つて傳播された名で無いのに拘らず兒

童走卒にさへ諳んぜられてゐる。斯の如きは餘り多く無い例で、八犬士その他の登場人物の名は歷史に非ざる歷史を作つて人名字書中の最大の名よりもより以上に何人にも知られてをる。橋本蓉塘翁が曾てこの人物を咏題として作つた七律二十四篇は恰も「八犬傳」の人物解題となつてをる。抄して以て名篇を結ぶのシノプシスとする。

雨窓無聊、偶々內子八犬傳を讀むを聞いて戲れに二十首を作る。

橋本蓉塘

金碗孝吉

風雲慘澹として旌旗を捲く　仇讐を勦滅するはこの時に在り　質を二君に委ぬ原と恥づる所　身を故主に殉ずる豈悲むを須たん　生前の功未だ麟閣に上らず　死後の名は先づ豹皮を留む　之子生涯快心の事　吳を亡ぼすの罪を正して西施を斬る

玉梓

亡國の歌は殘つて玉樹空し　美人の罪は麗花と同じ　紅鵑血は灑ぐ春城の雨　白蝶魂は寒

し秋塚の風　死々生々業滅し難し　心々念々恨何ぞ窮まらん　憐むべし房總の佳山水　渾て覺雲障霧の中に落つ

伏姫

念珠一串水晶明らかなり　西天を拜し罷んで何ぞ限らんの情　只道不佳人命偏に薄しと
寧ろ知らん毒婦恨平らぎ難きを　業風過ぐる處花空しく落ち　迷霧開く時銃忽ち鳴る　狗
子何ぞ曾て佛性無からん　看經聲裡三生を證す

犬塚信乃

芳流閣傑勢ひ天に連なる　奇禍危きに臨んで淵を測らず　跬歩敢て忘れん慈父の訓　飄零
枉げて受く美人の憐み　寶力一口良價を求む　貞石三生宿緣を證す　未だ必ずしも世間偉
士無からざるも　君が忠孝の雙全を得るに輸す

濱路

一陣の罡風送春を斷ず　名花空しく路傍の塵に委す　鬣雲影を吹いて綠地に粘す　血雨聲
無く紅巾に泌む、命薄く刀下の鬼となるを甘んずるも　情は深くして豈意中の人を忘れん

玉蕭幸ひに同名字あつて　當年未了の因を補ひ得たり

犬川莊助

忠膽義肝儔稀なり　誰か知らん奴隷それ名流なるを　蕩郎枉げて贈る同心結　嬌客俄に賀
首讎となる　刀下寃を呑んで空しく死を待つ　獄中計の愁を消すべき無し　法場若し諸人
の救ひを缺かば　爭でか威名八州を振ふを得ん

沼蘭

殘燈影裡刀光閃めく　修羅鬪一場を現出す　死後の座は金蓮菡を分ち　生前の手は紫鴛鴦
を繡ふ　月沉秋水珠を留める涙　花は落ちて春山土亦香ばし　非命須らく薄命に非ざるを
知るべし　夜臺長く有情郎に伴ふ

犬山道節

火遁の術は奇にして蹤尋ね叵し　荒芽山畔日將に沉まんとす　寒光地に迸つて刀花亂る
殺氣人を吹いて血雨淋たり　豫讓衣を擊つ本意に非ず　伍員墓を發く豈初心ならん　品川
梟示す龍頭冑　想見る當年怨毒の深さを

曳手單節

荒芽山畔路叉を成す　馬を驅て歸來る日斜き易し　蟲唧凄涼夜月に吟ず　蝶魂冷澹秋花を抱く　飄零暫らく寓す神仙の宅　禍亂早く離る夫婿の家　賴ひに舅姑の晩節を存するあり　欣然寡を守つて生涯を送る

犬田小文吾

夜深うして劫を行ふ彼何の情ぞ　黑闇々中刀に聲あり　圈套姦婦の計を逃れ難し　狗囚赤だ俠夫の名を損ぜず　對牛樓上無狀を嗟す　司馬濱前不平を洩らす　豈翅だ路傍狗鼠を誅するのみならん　他年東海長鯨を掣す

船蟲

閉花羞月好丰姿　巧計人を賺いて人知らず　張婦李妻定所無し　西眠東食是れ生涯　牡霜肅殺す刀三尺　夜月凄涼たり笛一枝　天網疎と雖ども漏し得難し　閻王廟裡擒に就く時造次何ぞ暫て復讎を忘れん　門に倚て媚を獻ず是權謀　風雲帳裡無雙の士　歌舞城中第一流　警柝聲は沉む寒堞の月　殘燈影は冷やかなり峭樓の秋　十年劍を磨す徒爾に非ず　血家觸髏を貫ぬき得たり

犬飼現八

弓を杖ついて胎內竇の中を行く　膽略何人か能く卿に及ばん　星斗滿天森として影あり鬼燐半夜閃いて聲無し　當時武藝前に敵なし　他日奇談世盡く驚く　怪まず千軍皆辟易するを　山精木魅威を避く

犬村大角

猶ほ遊人の話頭を記する有り　庚申山は閲す幾春秋　賢妻生きて灑ぐ熱心血　名父死して留む枯髑髏　早く猩奴名姓を冒すを知らば　應に犬子仇讐を拜する無かるべし　寶珠是れ長く埋沒すべけん　夜々精光斗牛を射る

雛衣

滿袖啼痕血痕に和す　冥途敢て忘れん阿郎の恩を　寶刀を掣將つて非命を嗟す　靈珠を彈了して宿寃を報ず　幾幅の羅裙都て蝶に化す　一牀繡被籠鴛を尙ふ　庚申山下無情の土

佳人未死の魂を埋却す

犬江親兵衛

多年劍を學んで靈場に在り　怪力眞に成る鼎扛ぐべし　鳴鏑雲を穿つて咆虎斃る　快刀浪を截つて毒龍降る　出山赤手强敵を擒にし　擁節の青年大邦に使ひす　八顆明珠皆楚寶　就中一顆最も無雙

妙椿

八百尼公技絶倫　風を呼び雨を喚ぶ幻神の如し　祠邊の老樹精萃を藏す　帳裡の名香美人を現ず　古へより亂離皆數あり當年の妖祟豈因無からん　半世賣弄す懷中の寶　靈童に與す良玉珠

里見氏八女

匹如百兩王姬を御す　之子于に歸ぐ各宜きを得　偕老他年白髮を期す　同心一夕紅絲を繫ぐ　大家終に團欒の日あり　名士豈遭遇の時無からん　人は周南詩句の裡に在り　夭桃滿面好丰姿

大丶

名士頭を回せば卽ち神仙　卓は飛ぶ關左跡飄然　鞋花笠雪三千里　雨に沐し風に梳る數十年　縱ひ妖魔して障碍を成さしむるも　古佛因緣を證する無かるべけん　明珠八顆都て收拾す　想ふ汝が心光地に凭て圓きを

里見義成

依然形勝關東を控ふ　劍豪犬士の功に非ざる無し　百里の江山掌握に歸す　八州の草木威風に偃す　使橋敗を取るは車戰に由る　赤壁名と成すは火攻の爲めなり　强鄰を壓服する果して何の術ぞ　工夫唯英雄を攬るに在り

八犬傳を讀むの詩　補

姥雪與四郎・音音

亂山何れの處か殘燐を吊す　乞ふ死是れ生眞なり回し　薄命紅顏の雙寡婦　奇緣白髮の兩

新人　洞房の華燭前夢を溫め　仙窟の煙霞老身を寄す　錬汞服沙一日に非ず　古木再び春に逢ふ無かる可けん

河鯉權守

それ遠謀禍殃を招くを奈ん　牆邊耳あり隄防を缺く　塚中血は化す千年碧なり　九外屍は留む三日香ばし　この老の忠心日を皦ふるが如し　阿誰貞節凜として秋霜　也た知る泉下遺憾無きを　槻を舁ぐの孤兒戰場に趁く

墓田素藤

南面孤を稱す是れ盜魁　匹として昼氣樓堂を吐くが如し　百年の艸木腥丘を餘す　數里の山河劫灰に付す　敗卒庭に聚まる眞に幻矣　精兵竇を潛る亦奇なる哉　誰か知らん一滴の黄金水　翻つて全州に向つて毒を流し來る

里見義實

百戰孤城力支へず　飄零何れの處か生涯を寄せん　連城旦に擁す三州の地　一旅俄に開く

十匹の基ひ　靈鴿書を傳ふ約あるが如し　神龍海を攪す時無かる可けん　笑ふ他の豎子貪慾を逞ふするを　閉羅終に良將の資となる

以上二十四首は蓉塘集中の絶唱である。漢詩愛誦家中にはまゝ諳んずるもあるが、小説愛好者、殊に馬琴隨喜者中に知るものが少いゆゑ抄錄して以てこの餘談を結ぶ。（昭和三年四月佛誕會）

曲亭馬琴

笹川臨風

一

馬琴の肖像を見ると、戯作者と言はんよりは、昔の醫者然としてゐる。自分も曾て醫術を修業し、息子の宗伯は醫者であつたせゐかも知れないが、如何にも尤も臭いしかつめらしい相好だ。一體に根が几帳面で、事細かにつけてゐる日記を見ても、中々にやかましやであつたのだ。自墮落な性格や瓢輕な性質の多い戯作者仲間に、この人ばかりは、まことに嚴格であつた。

馬琴は天才肌ではなくして、力行不斷の人であつた。他の戯作者連とは、異つて、博聞該博の人であつた。和漢の學に通じて、識見も高かつた。小說稗史を述作する人々を戯作者と稱する江戸時代に彼のみは卓然として靈光殿の如くあつた。戯作者の品位を高め、地歩を向上させたのは、全くその力であつたと言つて善い。されば天保七年八月十四日七十歳の賀筵を兩國萬八樓に開いた時に、集まつたものは、その數八百餘人に及んで、東條琴臺、大窪逸民、菊池五山、谷文一、渡邊崋山、長谷川雪旦、屋代弘賢、柳亭種彦、爲永春水、歌川國貞、溪齋英泉、歌川國芳、歌川廣重、柳川重信を初め、

武家には薩州家家老伊具氏、雁の間留守居三十一人、帝鑑の間二十人、菊の間三人、その他儒者、書家、畫家、戯作者、草紙問屋、書材、紙問屋、板木師等を網羅してゐる。「この外武家町人聊も風流心あるものは出席す。やつがれ平生紹介なくして尋ね來る人に決して對面せず候故、今日こそ馬琴を見むとて出候生和學者生書生賣卜者など名も知らぬ者多くいで候」と、會主馬琴自らが廣言してゐる。とにかく盛んな會で、中座敷四十疊、左右二十四疊、別席十二疊の萬八樓が立錐の地もなく、縁側に出て膝を合せてゐるもの多く、下座敷も、また寸隙がなかつた。然し、こゝにも馬琴の堅苦しい、性質はよく現はれて、「酌取には藝子を雇ひ候が、當世の通例の由にて、世話人等藝子五人を召寄せて酌を取らせ候ひき、之等は最も厭はしく會主の本意にあらず候へ共、世話人等の計らひなれば、止む事を得ず、苦々敷思ふのみ、やつがれはその藝子等をよくも見ず、まいて物などいふ事もあらず候ひき」と、藝者排斥をしてゐるが、末段の潔癖振りはいらぬことだと、思はず苦笑させられる。

この獨りよがりの潔癖振りは、馬琴の一生を通じ、隨處に現はれて、屢々他人と衝突してゐる。京傳と仲違へをしたのも、三馬と氷炭相容れざるも、これがためである。彼には博學と言ふ誇りがあつたから、他人を見縊つて、眼下に見てゐた。然し彼が一たび出でて、江戸の戯作者社會がその地位を向上したのも、又疑ふべからざる事實であつた。

江戸の文學は遙に上方の文學に後れてゐる。上方にては、假名草紙より進んで、浮世草紙が述作せられた。一代の奇才、井原西鶴が、その透徹せる觀察と、輕妙にして清艶なる文章とを以て、幾多の浮世草紙を著はして、江戸時代の文學は、始めて光彩があつた。北條團水、錦文流、都の錦等これに繼いで起り、江島屋其碩、八文字屋自笑等出づるに及んで、いはゆる八文字屋本なるものが、一時盛んに行はれた。これ等は皆世態人情を巧に描寫した純文藝のものであつた。

然し江戸にては、まだ文學の曙光さへ認められなかつた。僅に子供の御伽噺の、しかも畫を主とした赤本が現はれたに過ぎなかつた。「桃太郎」「むぢなの敵討」「舌切雀」「ぶんぶく茶釜」「猿蟹合戰」「ばけ猫又やしき」等の類で、畫工の名はあるが、作者の名はない。蓋し作者はなくして、畫工の自畫自作であらう。その畫工はいづれも浮世繪の畫家で、奥村政信、羽川珍重、近藤清春、山本重春、西村重長、鳥居清滿、鳥居清信などの名が見えてゐる。

赤本は、その標紙の色に依りて斯く稱されたものである。更に標紙が黑色となりて、黑本なるものがつゞいて、やゝ進歩したやうに見えるが、御伽噺、化物話、敵討物、實錄話で、同じく畫を主としてゐる。「物草太郎」「敵討巖流島」「天神記」「化物大福帳」などがそれで、畫家として、富川房信、鳥居清經、北尾重政、鳥居清滿、鳥居清信、鳥居清重、鳥居清廣、鳥居清秀、富川吟雪、奥村利信などの名

が見えてゐるが、なかには、作者の名を記したものも間々ある。丈阿圓枕齋、柳川桂子のごときである。

草草紙は更に再變して青本となつた。その主題は黑本よりはやゝ範圍が廣くなり、册數も間々五册その最も多きものになると、十册物さへあつた。畫工の署名はあるが、作者の名は時にあるに過ぎない。「酒呑童子」「竹田新からくり」「風流曾我」「蜷川新左衞門」「挑灯紋盡」「高砂相生松」「和光一休咄」「和田軍勢門出大盃」「烏勘左衞門出世掛鯛」などの類が、赤本に比べて、多少は進歩してゐるが、まだ江戸文學は搖籃期であつたのである。

安永四年に戀川春町が「金々先生榮華夢」を出版して、青本の趣向が一變した。青本を一名黃表紙と言ふが、以前は青色が勝つてゐたので、青本と稱したが、後には黃色が勝つて來たので、黃表紙と唱へて、その間に區別なく、通じて青本又は黃表紙と稱したのである。然し人によると、「金々先生榮華夢」以後を黃表紙と言ひ、その以前の青本と區別をつけるものもある。

「金々先生榮華夢」は盧生邯鄲の夢を當世風に飜案し、畫を主として、その間に輕妙な筆で、世態を諷刺し、人情を穿つたところに、新し味がある。これよりしてこの風流行し、名作競ひ出で黃表紙全盛の世となつて、江戸の文學はやゝ文學らしいものを作り出すことゝなつた。

式亭三馬はその「稗史億說年代記」に於て、黃表紙の名作二十三部なるものを擧げてゐる。その誤

謬を正して、これを列擧すると、次の如くである。

金々先生榮華夢	戀川春町作	安永四年板
高慢齋行脚日記	同	同　五年
桃太郎後日噺	喜三二	同　六年
鼻峰高慢男	同	同　年
親敵討腹鼓	同	同　年
三升增鱗祖	春町	同　年
三幅對紫曾我	同	同　年
楠無益委記	同	同　七年
虛言八百萬八傳	本太郎	同　八年
鐘入七人化粧	喜三二	同　九年
大達寶船	芝全交	同　年
長生見度記	喜三二	天明元年
嘘多雁取帳	馬鹿人	同　三年
		同　年

從夫以來記	竹杖爲輕	同　四年
大悲千錄本	全交	同　五年
莫切自根金生木	唐來三和	同　年
悅贔屓蝦夷押領	春町	同　八年
文武二道萬石通	喜三二	同　年
鸚鵡返文武二道	春町	寛政元年
拜壽仁王參	全交	同　年
遊妓寔　卵　角文字	同	同　二年
鼻下長物語	同	同　四年
十四傾城腹之內	同	同　五年

然し名作はこれに止らない。京傳の作中にこれ等の中に伍して遜色のないものが幾つかある。馬琴も時代の潮流に投じて、その處女作は、寛政三年板の「四十兩盡用而二分狂言」と言ふ黃表紙であつた。寛政二年深川永代寺の境內にて壬生狂言の興行あり、それよりして壬生踊が市中に流行したので、寛政三年には、櫻町慈悲成の「壬生踊戲作面目」芝全交の「壬生狂言なほして唐本寢言直讀見臺萩」、內田新好の

「壬生里色名代の振袖」など、これに當てこんだ諸作少からず馬琴もその流行の名に因みて、この書を著はしたのは彼が二十五歲の作である。この書には京傳門人大榮山人と署して、文壇の流行兒京傳の餘光を仰いでゐる。この後にも馬琴は「花春風道行」「荒山水天狗鼻祖」「御茶漬十二因緣」「衿建米」「福壽海無量品玉」「心學晦莊子」「堪忍五兩金言語」「曲亭增補萬八傳」「四遍摺心學草紙」の類を幾多著作してゐるが、黃表紙は彼の柄ではなかつた。輕妙洒落、滑稽突梯の離れ業は到底馬琴子の向くところでなかつた。

明和安永以後に至りては、江戶文化も次第に爛熟の期に入りて、文學にも漸く見るべきものを出し一方には黃表紙の變化を促すとともに、他方には花柳界の通を身上とし、巧妙なる描寫を以てこれが穿ちを本領とした洒落本が流行し、天明、寛政に入りては、盛んに幾多の名作を出した。京傳は最もこれを得意として、寛政三年「娼妓絹ぶるひ」「錦の裏」「仕懸文庫」を出すに及んで、當局の忌諱に觸れて、作者は手鎖五十日、板元蔦屋は財產を半ば沒收せられ、三書を初め、從來作るところの洒落本は絕板を命ぜられ、これよりして後、京傳はまたその才筆をこの種のものに揮はなかつた。馬琴は洒落本を罵りて、書肆よりこれが起草を懇請されたが、斷然これを拒絕したと言つてゐるが、この種の著述は亦彼の最も不得手なものであつた。

彼は京傳、三馬その他の黃表紙、洒落本作家の多くと同じく江戶生れであつたが、江戶っ子らしい

性格の最も缺乏した人であつた。道學者らしい、しかも頗る無意氣な、不粋な、何となく重くるしい田舍じみたところがあつた。黄表紙、洒落本が向かなかつたのも當然である。

こゝに於て馬琴は讀本に向つた。これ彼の長所で、適材を適所に用ひたものであつた。

讀本と名のつくものゝ初はいつであつたらうか。通例、近路行者の「英草紙」「繁々夜話」などを以て嚆矢としてゐる。「英草紙」は寛延二年に、「繁々夜話」は明和三年に刊行されてゐる。建部綾足の「西山物語」、上田秋成の「雨月物語」などもその仲間で、形から言ふと、一二の取除けはあるが、概して半紙本、質から言ふと、時代物の物語である。殊に支那小説の飜譯飜案は讀本の流行を助けて力多かつた。寶暦七年には岡島冠山子。「通俗忠義水滸傳」あり、同十年には、烟水散人に「通俗隋煬帝外史」あり、寛政二年には、宿屋主人の「通俗醒世恒言」あり、綾足は「本朝水滸傳」を著し、京傳には「通俗大聖傳」の作があつた。

馬琴は寛政七年に初めて、「高尾船文字」なる讀本を著はし、享和三年に「花釵兒」「月氷奇縁」文化元年には「小説比翼文」「稚枝鳩」「石言遺響」を作つた。洒落本に手を燒いた京傳は、專らこの方面に向つて精力を注ぎ、寛政十一年には、「忠臣水滸傳」前編を、享和元年にはその後編を、同三年には「安積沼」を、文化元年には「優曇華物語」を出した。十返舍一九ですらも、享和二年には、「深窓奇談」を公にしてゐる。而して黄表紙に成功せず、洒落本に不向であつた馬琴は、讀本に於て最

もその技倆を顯はしたのである。

二

馬琴は明和四年六月九日、江戸深川高松通淨心寺附近に於て呱々の聲を揚げた。本姓は瀧澤氏、父を興臧と言ひて、智慧伊豆として聞えた松平信綱の一族なる旗下の士松平氏に仕へて、その家宰となつてゐたが他の妬む所となり、追はれて浪々の身となり、窮厄の間に馬琴を生んだ。馬琴、幼名を佐五郎と呼び、兄は二人あつたが、馬琴は幼少よりして讀書を好み、貧しき中にもこれを廢せず、後年博學の基は、既に少年時代よりこれを築いた。

少年の時、さる武家に奉公したが、蛟龍池中の物に非ず、主人の傲慢甚しきに堪へ兼ねて、一夜壁に

木枯に思ひたちけり神の旅

の一句を題して、飄然その家を遁れ、兄とともに旗下の士戸田氏に仕へたが、その後流浪して轉蓬の寄るべ定めぬの身の上となつた。或時は武家に仕へ、或時は醫術を學び、又儒學に志し、又狂歌師

たらんとするなど、その方向は轉々として、昨日は東、今日は西の如き有様であつた。

群書を渉獵し、殊に文才があつたので、遂に文筆を以て世に立たんことを志し、當時賣出しの山東京傳の門を叩いて、その門人たらんことを請うた。馬琴はその「伊波傳毛之記」に於て、「この年（寛政二年）の秋、馬琴初めて京傳に見ゆ、一見して舊識の如し、その好む所同じければなり、京傳は寶暦十一年辛己秋八月十五日、深川木場なる典物舗に生れたり（是年三十歳なり）、馬琴は明和四年丁亥夏六月五日、深川淨心寺近邊なる武家に生れたり（是年二十四歳なり）、その幼少の日、各居る處遠からず、僅に相去る事數町に過ぎざれども、その寺小屋同じからず。（京傳は手迹を深川伊勢崎町邊なる御家人行方角太夫に學びたり、この人は御家流にて、私に手迹の指南をしたり、馬琴は深川八幡一の鳥居邊なる蒙師小柴長雄に學びたり、この人は三井親和が高弟なりき）且つ武家と町家の差別あるを以て、相識らざること二十餘年、この日各舊里を告ぐるに及んで、互に拍掌して、もて奇遇とせり」とありて、一見舊の如く記してゐるが、一は當時文壇の流行兒、一は名もない一介の若造、果して俄に爾汝の交を訂したものか、甚だ疑はしい、京傳に弟子として取ることを辭みて、友として交はらんと言つたとある。然し門人云々に關しては、馬琴と京傳の弟京山との間に違つた見解もあつたが、「蓋用而二分狂言」に京傳門人大榮山人と署したのを見ても、その初めは、門人の待遇であつたらうと思はれる。後年馬琴は高名となつたので、例の剛愎は京傳門人と署したのを恥ぢて、

何かと自家を高く標榜せんとつとめてゐるから、當初の馬琴に就いては、疑はしいことが多々ある。京山が「蜘蛛の絲卷」にて、「曲亭馬琴は寛政の初、家兄の許へ酒一樽持ちて初めて來り、門人になりたき由をいふ、所を聞けば、深川仲町の裏家に獨り住むよしを言ふ。家兄（京傳）曰く、草雙紙の作は世を渡る家業ありて、かたはらになぐさみにすべき物なり。今時鳴る作者皆然り、さて又戯作は弟子として教ふべき事一つもなし、されば己れをはじめ、古今の戯作者一人も師匠はなし、先づ弟子入はおことわりなり、しかし心安く、話に來給へ、又出きたるものあらば、見ることは見てやるべしと示されけるに、しば〳〵來りてもの問へり」とあるのは、如何に馬琴と仲違ひしたとは言へ、決して、馬琴を蹴落したものではなくして、寧ろ眞を穿つた說だと思はれる。このところ馬琴の言ひ分の方が得手勝手である。

然しかいなでの戯作者が一本の筆にて生活を營まうとするのは、容易なことでなかつた。馬琴は遂に賣卜者となりて、神奈川に赴いたが、これも思はしからずと見えて、久しからぬうちに、又江戸に戻つた。然し歸宅して見ると、過ぐる日の海嘯で、なけなしの家財は洗ひざらひ流されて、窮、骨に徹するばかりであつたので、京傳の食客となりて、その手傳けをすることゝなつた。京傳は洒落本一件で、手痛く懲りてゐた際とて、馬琴に折々代作をさせた。「龍宮擅鉢之木」「實語教幼稚講釋」の如きはそれである。やがて日本橋通油町の書賈で、當時文壇に於ける一種の保護者とも見るべき書賈、

耕書堂蔦屋重三郎に懇望されて、その家の奉公人となり、寛政五年の春には、曲亭馬琴の名で、黄表紙四種を出した。

曲亭は「漢書」陳湯傳及大明一統志に出てゐる山の名で、「巴陵曲亭の陽に樂む」などと見えてゐるのを取り、馬琴は、「十訓鈔」にある小野篁の句に、「才馬鄉（司馬相如）に非ざれば、琴を彈ずるも能はず」と言ふのに據つたのださうだ。名を解、字を瑣吉と稱したのは、解は蟹、瑣吉は郭璞の「江賦」に「瑣吉は蟹を腹とす」とあるに依つたので、通稱の佐五郎を蔦屋奉公中に、佐吉と改めたのを、洒落て書いたのである。著作堂主人、蓑笠漁隱、飯臺陳人、信天翁、魁臺子、傀儡子、玉亭光峨、玄同、愚山人、逸竹齋達竹、狂齋、篁民、鸞齋、閑齋、彫窩主人等の別號が、時に依りて用ひられてゐる。

京傳は讀書丸や煙管、煙草入を商賣し、三馬は江戸の水や薄化粧、金勢丸龍樹散、蘭奢袋などの化粧品、藥品を賣つてゐた。京傳が言ふ如く、何等か本職がなくしては、戯作だけではやり切れなかつたのである。「物之本江戸作者部類」に、「昔は草雙紙の作者に潤筆を送る事はなかりき、喜三二、春町、善好などは、毎歳板元の書賣より、新板の繪草紙、錦繪を多く贈つて新年の佳義を表し、且つその前年の冬、出板の草雙紙に當り作あれば、二三月の頃に至りてその作者を遊里へ伴ひ、一夕饗應せしのみなりしに、寛政に至りて、京傳馬琴のみ、殊に年々に行はれて、部數一萬餘を賣るより、商賣

蔦屋重三郎、鶴屋喜右衛門と相謀りて、初めて草雙紙の作に潤筆を定めたり。こは寛政七八年の事にて、當時は京傳、馬琴の外に潤筆を受くる作者はなかりしに、後に至りては、さしもあらぬ作者すらすべて潤筆を得る事は、件の兩作家を例にしたるなり」とある。寛政七年には馬琴の作る「在于爰身成金言」、同八年には、「小夥雨見越松毬」「堪忍五兩金言語」「曲亭增補萬八傳」「四遍摺心學草紙」「墨田川柳の禿筆」「報讎獺狂夫」等あるが、初めて讀本に筆を染めて「高尾千字文」を著はしたのは、寛政八年のことであるから、京傳と同じく、この頃に馬琴に對して、潤筆料を拂つたかどうかは頗る疑はしいが、とにかく、當時の戯作者は潤筆料を得なかつたのである。戯作者の仲間入した馬琴の窮乏は推して知るべく、彼が蔦重に奉公したのも、又已むを得なかつたのである。

蔦重の家に在ること三年ばかりにして、九段下飯田町二町目の下駄屋伊勢屋清右衛門の寡婦お百に入夫して、馬琴は清右衛門と稱したが、その後、商賣をやめて、讀書手習を兒童に授け、又藥をも調合し、これにて生計の助けとした。彼がこの家に、入夫したのは、二十七歳の時で、妻お百は三つばかりの年上であつた。彼が專ら著作に從事し得たのはこれからである。

著作も次第に多くなり、文名も漸く聞えて來た。特にその筆を讀本に向けたのは、彼の成功の初歩であつた。寛政八年板の「高尾船文字」は彼が初筆の讀本ではあつたが、中本形で、半紙本ではなかつた。させる評判はなく、江戸にては三百部ばかり賣つたが、大阪へ送つた百五十部は過半返品と

なつて戻つて來た。同十年には繪本大江山物語を作り、十一年には「戯子名所圖會」を著はした。享和三年、大阪の書賈河内屋太助の依頼に應じて著はした「月氷奇縁」は、時好にかなつて、江戸大阪にて千百部賣つた。これより年に幾多の讀本を著はし、文化元年の「稚枝鳩」「小説比翼文」「石言遺響」についで、同二年の、「盆石皿山記」「四天王劇盗異録」「敵對誰也行燈」同三年、「椿説弓張月」「三國一夜物語」「新編水滸畫傳」「勸善常世物語」「敵討裏見葛葉」「苅萱後傳玉櫛笥」同四年の「墨田川梅柳新書」「括頭巾縮緬紙衣」「新累解脱物語」「園の雪」「旬殿實々記」同五年の「松浦佐用姫石魂錄」「秋の七草」「賴豪阿闍梨怪鼠傳」「三七全傳南柯夢」「雲妙間雨夜月」と矢つぎ早に刊行し、弓張月の如きは、文化七年に至りて全部二十九卷を完結し、最も世評が高くあつた。これに對して板元は潤筆料の外に、金十兩を作者に贈つて、謝意を表した。「稚枝鳩」は淨瑠璃に作りなされ、「四天王劇盗異録」は大阪角座にてその一節を演出し、「三國一夜物語」は同じく角座にて狂言に仕組み、片岡仁左衛門の淺間左衛門は生涯第一の大出來にて、見物人群集し、「弓張月」は「鎭西八郎譽の弓勢」と題して、大阪にて興行した。馬琴の名聲は隆々として、群衆作家を壓倒する勢であつた。

馬琴の著はすところは、その數多かつたが、全部百六册と言へる未曾有の長編「里見八犬傳」は文化十一年初めてその初輯を刊行し、二十八年を經て、天保十二年に至りて完結を告げた。「朝夷巡島記」「開卷驚奇俠客傳」「近世説美少年錄」は何れも、大部の趣向であつたが、完結に至らなかつた。

馬琴作るところの讀本は、その數極めて多いが、そのうちにても、「八犬傳」「弓張月」「三七全傳南柯夢」は三大奇書と稱せられた。隨筆には「玄同放言」「燕石襍誌」「烹雜之記」「耽奇漫錄」「兎園小説」等があり、その一生の述作は、莫大の數に上つてゐる。

「八犬傳」は半生の心血を瀝いだ長篇であるが、中途でだれ氣味になつてゐる。然し流石に馬琴の魂麗にして調子の善い文章は到る處に大珠小珠を圓盤に轉ずる如き美觀がある。富山に於ける伏姫の一段、濱路と信乃との別離、芳流閣の組討、庚申山の奇勝など、いづれも、名高くあるが、犬坂毛野の對牛樓讎討の一段は最も善い。若しそれ最も善く纏つた傑作を求めると、「弓張月」に指を屈せずばなるまい。但し怪獸を點出した一段は無くもがなと思はれる。猶馬琴が處々に博學振りを示して、「八犬傳」に龍の講釋や弓の講義をなすなんかは、衒學の嫌ひを免れない。

「八犬傳」は圖より「水滸傳」に得る所が多いが、「水滸傳」の三十六人が個々の性癖を發揮するのを巧みに描寫してゐるのとは違つて、「八犬傳」の八犬士は、仁義禮智忠信孝悌の個性を有すべき筈であるのに、その個性は共通性となりて、その間に差別がない。

とにかく忠孝を説き、尊王心を鼓吹し、堂々として史外の史を述作してゐるところは、到底他の作家の企て及ぶ所でなく、馬琴獨得の壇場で、まことに壯觀なりと言はねばならない。彼が江戸作家の最も大なるものとして、泰山北斗を以て目せらるゝは、決して偶然でない。

三

馬琴は中々に始末やであつた。日記を見ても、下女の出入に就いて亘細に書いてあるほどに綿密周到の細心家であつた。京傳の如く遊里に沈湎する人でもなければ、三馬の如く酒を飲んで、ぶう〳〵言ふ男でもなかつた。その妻お百と來たら、家つきの我儘な上に、機嫌買ひの、頑固で下品な性質であつたから、馬琴も流石に困じ果てたことが少からずあつた。

娘に聟を取つて跡をつがせて、自分は飯田町から、神田明神下の末廣町、俚俗鼠屋横丁と言ふのに轉居したが晩年には四谷信濃坂、永井信濃守の下屋敷の裏手、青山六道の辻に近い所に移り住んだ。文名は愈々高くなり、當時小説界の大立者とし言へば、異口同音に馬琴と答ふるほどに盛名があつたが、家庭に於ては餘り惠まれなかつた。醫を以て松前侯に仕へてゐた嫡子鎭五郎興繼(宗伯)は天保六年五月八日、まだ四十路に足らぬ身に、父に先ちて歿した。馬琴夫妻の嘆きは言ふばかりもない。

つゐにゆく道にはあれど思ひきや
子に先き立てゝ嘆きせむとは

馬琴はその知れる渡邊崋山に頼んで、その肖像を描いて貰つた。殘るは孫三人、見るも涙の種であつた。

節儉家の彼も好める道とて、書物は手に任せて之を購ひて、その藏する所和漢書數千卷に及んだ。然し老年の、頼むはまだいたいけの孫のみであつたから、その書を賣却して金錢に代へ、又書畫會を催して、死後の貯蓄とし、孫の爲に官士の株を買つた。その信濃坂に轉居のことを述べて、「私事山の手は嫌ひに候へども、人の行方は心に任せぬ者にて、思ひがけなき所に餘命を送り候仕合に御座候、凡この度の諸雜費、私身分には大ぎやうにて、ちとの貯とては候はねど、借財を致し候ては憂を後に殘し候事故、衣食を省き候て求め置候祕藏の珍書などを多く沽却いたし候て、黄金を調へ候へ共、當年は物の價貴く、賣候には買人稀に候へば、これ將た思ふ如くならずて、不便利の事少からず候、かく孫等の爲に殘し置き候ため、かゝる苦心を致し候のみ、近火にて燒失ひしと思ひ、あきらめ候へば、惜むべきにあらず候へ共、再び得難き所藏の義に候へば、何となく忍ばれ候事に候へば」と、懇々の思ひを書籍に殘してゐるのは、流石に彼は文人學者で、憐れであつた。

天保四年の秋の頃から、馬琴は右眼が明かでなかつた。然るに天保九年の春頃よりは、更に左眼もかすんで、次第に見るものが朧げとなつた。この時「八犬傳」はまだ完結に至らない。天保十一年の

春までは十一行の稿本を五行四行に大書して、書きつゞけてゐたが、十一月になると、もう一字も書けなくなつた。半生の心血を瀝いだ「八犬傳」は是非ともこれを大成せねばならない。彼は氣が氣でないが、嫡子興繼は歿してしまつたし、嫡孫太郎興邦はまだ幼い童のことゝて手助けにはならない。そこで興繼の寡婦みゝが人並に字を書くから、これに敎へて筆記させた。然し漢語もあれば雅言もある。假名遣ひも正さねばならず、てにをはも大切だ。敎へて書かする方も容易でないが、敎へられて書く方も並大抵のことではない。まして、相手が七面倒臭い、やかましやの馬琴と來てゐるから、その困難は並々でなかつた。斯くして殆んど一年に程近き日子を經て、からくも稿本十卷を作り、「八犬傳」は大團圓を告げたのである。まことに稀有の力作であつた。

一つには次第に筆記にも馴れたのと、又一つには書肆にせがまれるまゝに、「八犬傳」完成後も、「玉石童子訓」「女郎花五色石臺」「新編金瓶梅」などをも起稿した。天保十二年の春には、妻お百も病歿して、馬琴は茶飲み友達を失つた。やがて嘉永元年十一月六日、一代の文豪曲亭馬琴は八十二歳の高齢でみまかつた。小石川茗荷谷なる清水山深光寺に葬つたが、會葬するもの無慮數千人、頗る盛んであつた。法諡を著作堂隱譽蓑笠居士と言ふ。

馬琴は精力家であつたのみならず、文を遺ることも捷く、あの高華絢爛な文章は、すら〳〵と流水の如く書かれた。結構は支那小說や、支那歷史や、また古い物語や傳說に負ふ所も多いが、自家の工

夫、立案も中々に豐富で雄大宏遠の趣向が少からずある。房總半島から關東一帶を舞臺とした「里見八犬傳」では、富山、庚申山を實際以上に、描き成して、空想の天地はまことに廣々としてゐる。從來の戲作者が鎌倉や大磯を假りて、戲作の天地としたのとは違つて、江戸以前の大塚や湯島や、圓山等は彼の筆に上つて武藏野時代を偲ばせるものがあつた。然もこれ等は皆馬琴の想化した土地であつた。

「弓張月」に源平時代を描き、「朝夷巡島記」に鎌倉時代を寫し、「八犬傳」に足利季世を背景としてゐるが、南北朝時代を多くその舞臺に使つてゐるのは、大いに注目すべき事柄である。「俠客傳」や「南柯夢」の如きはその例である。かゝる場合に於て、彼は南朝方であり、盛んに尊王の大義を鼓吹してゐる。他の群作家と異つてその識見は遠く群を拔いてゐたのである。

或時机に凭りながら、筆を執りて、「よし〳〵下女を殺して、井戸へ投げ込むことゝしよう」と獨語する。驚いたのは、それを立聞きしてゐた下女であつた。殺されては一大事、命あつての物種と、早々に主家を飛び出して、わつとばかりに親許へ泣きながら驅けつける。「早く暇を取つて下さい。番町皿屋敷のお菊のやうに殺されて井戸へ投げ込まれては、もう父さんや、母さんのお顏も見られない」とをい〳〵手放しの大愁嘆。兩親も吃驚仰天して、すぐさまお暇を頂戴したいと申出る。藪から棒の談判に、馬琴は面喰つて、一體どうしたのかへと、根掘り葉掘り聞き糺すと、實はかく〳〵と白

狀する。それ聞いた馬琴は澁面作つた相好を崩し、「そりや私の小說の趣向だわい」と膝を打つて種明しをする。「何ですつて、御趣向ですかこりや娘早まるにも程がある」と、あとは大笑ひになつたが、それほど馬琴は趣向に頭を惱ませたのである。

京傳は馬琴に取りて恩人であり、文壇への案內者であつたが、後年仲違ひをした。その重なる原因は斯うだ。文化六年の十二月、馬琴は「夢想兵衛胡蝶物語」を著はし、そのうちに、「忠臣藏」にある早野勘平の妻お輕の事に托して、遊女と妻とを同一視する非を正した。京傳の妻は新吉原玉屋の抱遊女玉の井といふもので、落籍してこれを呼び迎へ、名を百合と稱してゐた。されば京傳は馬琴のこの作を見るとはつたと怒り、翌七年の正月、弟京山と年賀のために馬琴を訪ひ、さて話次のついでこの事に言ひ及んだ。京傳言ふ、「遊女にも利巧なものもあれば馬鹿もありますぜ。人の妻となつて貞實のものも少くないや。一體身を花街に沈めるものは或は親のためとか、或は兄弟のためとかで、多くは、孝悌の行なのだよ。私は經學に暗いが、聖人がこれを許したらば何と言ふか知らん、どうだ一つ聖人に成り代つて返事をしてもらひたいんだね」と、大變な見幕であつた。馬琴聞いて、「いやお說は御尤です。こちらもつい粗漏で、あんなことを書いて、お憤りに遇つては、何ともお詫のしようがございません。然し考へても御覽なさい。世間には遊女を妻とするものが何千人何萬人あるか知らないが、私の書を見て怒つたり恨んだりするものは一向聞きません。女子と小人とは養ひ難し

と、聖人も仰せられてゐますから、如何に遊女が利巧でも貞實でも、聖人はその是非は論ずることもありますまいて、詩經にある漢水の遊女と言ふのは、今の賣色のことですが、詩經ではそれを譏つてゐます。もう二三ペンくり返し〳〵私の書物を讀んで下さい。さうすりやお怒は解けませう」と言つたが、京傳は猶々怒つて、言ひ爭はうとする。「兄さん、もういゝぢやありませんか」と、弟の京山が頻りになだめるので、京傳も話頭を他に轉じて、やがて兩人は別れ立ち戻つた。こんな小さな事件も要するに感情の衝突であるから、これから兩人の間は疎遠になつた。京山にすると、これらのことから馬琴と頗る相容れないものがあつて、「家兄（京傳）死去の時、馬琴へも知らせやりしに、寺へばかり（本所回向院）悴宗伯を名代として、自身來らず、舊友は蜀山翁までも來られしが、馬琴が來らざる故、人々宗伯に尋ねしに、病氣にはあらざる由、七日佛事の時も、馬琴をも書中にて招きしかど、佛前へ少しの物、使のみにて、その後亡兄のいたみも言ひにも來らず、書狀にもたづねず、音信不通なり。然るに馬琴書畫會をなす時、京山、京水越後の留守とは聞きながら、家兄亡後始めて來り、自筆の扇二本持參したるは、いかなる心ぞやと、妻旅より歸りて言ひける故、舊友なれば棄ても置かれずと、會の後ながら目錄もちて、かの下谷（神田）を尋ねしに、うりすゑと言ふ札を見て、行きし先きまで尋ぬべきにもあらねば歸りぬ。この事は天滿宮も照覽あらせ給へ、いつはりにあらず」と、盛んに厭味を言つてゐる。馬琴の「伊波傳毛乃記」「物之本江戸作者部類」にも京傳京山に關しては、

奥歯に物の挾まつたやうな記事が少からずある。京傳の怒りも大人氣ないが、馬琴が傲岸不遜も隨分他人の癪の種となつたのであつた。これ馬琴が作家としては大なるにも似ず、割合に人物としての與望が少い所以である。但し江戸時代に於て、人氣の多かつたに反して、近來馬琴の人氣が甚だ下火になつてゐるが、やはり彼は江戸の群衆作家に傑れて偉大なる文豪であつた。好くも好かぬとは人々の勝手であるが、これに依りて、彼を甲乙せんとするのは、見當違ひと言はねばなるまい。

八犬傳物語

終

昭和六年三月十四日印刷
昭和六年三月十八日發行

世界大衆文學全集第六十八卷
八犬傳物語

譯者　内田魯庵
發行者　山本美　東京市芝區愛宕下町四ノ四〇
印刷者　竹内喜太郎　東京市牛込區榎町七番地

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一一二一番至一一二四番

(日清印刷株式會社印刷)

世界大衆文學全集總内容

第一卷	鐵假面（佛國大デユマ）	大佛次郎	（既刊）
第二卷	家なき兒（佛國マロー）	菊池幽芳	（既刊）
第三卷	前線十萬（米國ヤン・ヘー）	櫻井忠溫	（既刊）
第四卷	アルセーヌ・ルパン（佛國ルブラン）	保篠龍緒	（既刊）
第五卷	椿姫マノン・レスコオ（佛國小デユマ）（佛國プレボオ）	久米正雄	（既刊）
第六卷	三銃士（佛國大デユマ）	三上於菟吉	（既刊）
第七卷	放蕩息子（英國ケイン）	菊池寛	（既刊）
第八卷	ダイヤモンドカートライト事件（英國フレッチヤー）	森下雨村	（既刊）
第九卷	オリヴァー・ツウィスト（英國デイツケンズ）	馬場孤蝶	（既刊）
第十卷	トウエーン名作集（米國トウエーン）	佐々木邦	（既刊）
第十一卷	祕密第一號他一篇（英國ホルラア）	木村毅	（既刊）
第十二卷	巴里の祕密（佛國シユー）	武林無想庵	（既刊）
第十三卷	アンクル・トムス・ケビン（米國ストー）	和氣律次郎	（既刊）
第十四卷	英米新進作家集（歐米諸家）	牧逸馬	（既刊）
第十五卷	メトロポリス他一篇（獨逸ハルボウ）	秦豐吉	（既刊）
第十六卷	カチユウシヤ（露國トルストイ）	近松秋江	（既刊）
第十七卷	九十三年（佛國ユーゴー）	早阪二郎	（既刊）
第十八卷	寶島他二篇（英ステイイヴンスン）	野尻清彦	（既刊）
第十九卷	スペードのキング四枚のクラブ（瑞西ツーセ）	小酒井不木	（既刊）
第二十卷	ステラ・ダラス（米國ブローチー）ラ・ボエーム（佛國ミユルセ）	森岩雄	（既刊）
第二十一卷	シャロック・ホームズ（英國ドイル）	延原謙	（既刊）

第二十二卷	ゼンダ城の虜（英國ホープ）	寺田鼎（既刊）
第二十三卷	紅鬱（英國オルツイ）	松本泰（既刊）
第二十四卷	宇宙戰爭（英國ウエルズ） 海底旅行（佛國ヴエルヌ）	木村信兒（既刊）
第二十五卷	平妖傳（支那羅貫中）	佐藤春夫（既刊）
第二十六卷	ルコック探偵 河畔の悲劇（佛國ガボリオー）	田中早苗（既刊）
第二十七卷	スカラムツシユ（米國サバチニ）	小田律（既刊）
第二十八卷	洞窟の女王 ソロモン王の寶窟（英國ハガード）	平林初之輔（既刊）
第二十九卷	海の義賊他一篇（佛國ベルネエド）	高橋邦太郎（既刊）
第三十卷	ボオ。ホフマン集（米國ポオ） （獨逸ホフマン）	江戸川亂歩（既刊）
第三十一卷	三等水兵マルチン（英國タフレイル）	福永恭助（既刊）
第三十二卷	幻島ロマンス（米國ゲール）	野口米次郎（既刊）

第三十三卷	ロモラ（英國エリオット）	賀川豐彥（既刊）
第三十四卷	世界滑稽名作集（歐米諸家）	東健而（既刊）
第三十五卷	世界怪談名作集（歐米諸家）	岡本綺堂（既刊）
第三十六卷	世界怪奇探偵事實譚（歐米諸家）	松本泰（既刊）
第三十七卷	グランド・バビロン・ホテル（英國ベネット）	平田禿木（既刊）
第三十八卷	水滸傳（支那施耐庵）	笹川臨風（既刊）
第三十九卷	永遠の都（英國ケイン）	戸川秋骨（既刊）
第四十卷	ロビンソン・クルーソー（英國デフオー） 十五少年（佛國ヴエルヌ）	白石實三（既刊）
第四十一卷	テス（英國ハーデイ）	廣津和郎（既刊）
第四十二卷	二都物語（英國デイツケンズ）	名原廣三郎（既刊）
第四十三卷	血と砂（西班牙イバニエス）	鈴木厚（既刊）

第四十四卷	カルメン。コロンバ（佛國メリメエ）	宇高伸一（既刊）
第四十五卷	ボムベイ最後の日（英國リットン）	小池寛次（既刊）
第四十六卷	小公子。小公女（英國バアネット）	佐佐木茂索（既刊）
第四十七卷	あの山越えて（米國カートン）	尾崎士郎（既刊）
第四十八卷	赤襟衣物語（佛國ゴロオー）ビムリコの博士（英國キユウ）	大木篤夫（既刊）
第四十九卷	闇を縫ふ男（英國オルチイ）	淺野玄府（既刊）
第五十卷	ガリヴアーの旅（英國スウイフト）	鈴木彦次郎（既刊）
第五十一卷	十字軍の騎士（波蘭シエンキヴチ）	森田草平（既刊）
第五十二卷	シーホーク（米國サバチニ）	小田律（既刊）
第五十三卷	黒星（米國マツカレー）	和氣律次郎（既刊）
第五十四卷	ノートルダムの傴僂男（英國ユーゴー）	松本泰（既刊）

第五十五卷	冬來なば（英國ハツチンソン）	木村毅（既刊）
第五十六卷	クオ・ヴアヂス（波蘭センキウキツチ）	直木三十五（既刊）
第五十七卷	ラ・バタイユ（佛國フアレエル）震天動地（佛國ルブラン）	高橋邦太郎（既刊）
第五十八卷	千一夜物語（戀愛篇）（レーン原譯）	森田草平（既刊）
第五十九卷	モーブラ（佛國サンド）	大村雄治（既刊）
第六十卷	ソーンダイク博士（英國フリーマン）	水野泰舜（既刊）
第六十一卷	ヂエイン・エア〔上卷〕（英國ブロンテイ）	遠藤壽子（既刊）
第六十二卷	ヂエイン・エア〔下卷〕（英國ブロンテイ）	遠藤壽子（既刊）
第六十三卷	ウオタ・ベビ（英國キングスレ）	阿部知二（既刊）
第六十四卷	沙翁物語（英國ラム）ワグネル物語（英國マックスペデン）	菊池重三郎（既刊）
第六十五卷	ヴエンデッタ（英國マリー・コレリ）	千葉龜雄（既刊）

第六十六卷	聊齋志異（支那蒲松齡）	田中貢太郎（既刊）
第六十七卷	西遊記（支那邱處機）	弓館小鰐（既刊）
第六十八卷	八犬傳物語（馬琴）	内田魯庵（既刊）

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black